

都留文科大学報

Vol.145
March. 2021

特集：新型コロナ禍における
大学の対応（連載）

さよなら文大／おくることは
旅立つことば／卒業論文題目
文大だより／ぶんだい堂





退職にあたって —都留文科大学の良き伝統—

学校教育学科教授 鶴田清司

本学に赴任したのは1985年4月。あれから36年が過ぎた。当時私はまだ29歳。大学院の博士課程を出て、いきなり初等教育学科の専任教員(国語教室所属)として採用された。研究業績が少なく、非常勤講師の経験もなかったが、「将来の可能性はある」という理由で選ばれたようである。

1年目は大変だった。当時の初等教育学科は学生数も多く、いきなり15人の卒論ゼミ生を抱えることになった。当然、講義も初体験。一回目の授業は緊張のあまり早口になって、予定していた内容がたった15分で終わってしまった。3年生のゼミでは、私の大学院時代のテキスト(Palmer, R. E. *Hermeneutics*)をいきなり原文で読ませるなど、失敗の連続。学生が多いため教育実習の派遣指導も大変で、最初の年は1週間かけて四国の実習校を7校訪問した。愛媛県宇和島市から香川県高松市まで、まるでお遍路さんのような出張であった。

先輩教員で、芥川龍之介の研究で知られる関口安義先生は、研究室が隣ということもあって、私によく声をかけてくださった。「昨日は何枚書きましたか?」が毎日の挨拶である。関口先生は大変に研究熱心な先生で、寸暇を惜しんで論文の執筆に没頭されていた。本学は、教員の研究時間を十分に確保してくれる勤務条件(授業は基本的に週5コマ)となっている。関口先生の激励(圧力?)と恵まれた勤務条件のもとで、自分の研究を深めることができた。この36年間に出版した単著は17冊、論文は400編を超える。

また、本学の研究支援体制の一つである学外研究の制度を利用して、博士論文も提出することができた。『〈解釈〉と〈分析〉の統合をめざす文学教育—新しい解釈学理論を手がかりに—』(2010年、学文社)は私のライフワークとなった。今では入手困難であるが、早稲田大学のリポジトリで検索すれば、誰でも読むことができる。

こうした業績が評価されたのか、日本最大の国語教育学会である全国大学国語教育学会の理事長も務めることができた。この職は従来、旧高等師範系の筑波大学、広島大学のいずれかの大学から理事長が選出されてきた。教員・院生が多く、学会事務局体制が作りやすいことがその大きな理由である。そんな中で都留文科大学から理事長が選出されたことは異例中の異例であった(私の就任に合わせて学会事務局も業者委託となった)。

学生のことにについても触れておきたい。本学の魅力は、昔から学生の質が高いということである。それも偏差値には表れないような人間的な資質・能力である。接していて楽しく気持ちがいい。これは何にも代えがたい良き伝統である。私が36年間に指導したゼミ生の数は300人を超える。卒業生が教育界はもとより、多方面で活躍してくれることは大きな喜びである。

最後に、36年間お世話になった都留文科大学に深く感謝するとともに今後のさらなる発展を祈念したいと思う。



ゼミ1期生15人とともに



過ぎし三十余年

英文学科教授 福 島 佐江子

私は1987年4月に都留文科大学に赴任致しました。その頃退職される先生のご挨拶の中で30数年勤められたというお言葉を聞き、当時の自分の年齢を超えており、それほど長く勤められるものかと内心思っていました。光陰矢の如し、私も34年間都留文科大学で教鞭を取らせて頂き、定年を迎えることになりました。

赴任してからしばらくは、専任女性教員は1割かそれ未満だったでしょうか。教授会をはじめとする会議では男性教員の姿ばかりが目に入り、縮こまって俯いておりました。今では女性教員も委員長や学科長を務めるのは当たり前ですが、当時はそのようなこともありませんでした。

月日が流れ、私も英文学科主任（当時は学科長ではなく、主任の名称）を務めることになり、学科をまとめていく苦労を体験致しました。その後、50代半ばでクモ膜下出血を患いましたが、幸運にも復帰することができ、定年まで働き続けられたことに感謝しております。教職員の皆様、学生達をはじめとする多くの方々に支えられたお蔭です。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。この体験から人は一人では生きられないことを痛感し、命の大切さ、有り難さを身に沁みて感じております。

在任中、境遇、出身地等の異なる学生達からも多くの事を学ばせて頂きました。苦勞して大学に来て、卒業していった学生もいました。長年勤めた間には、ゼミの教え子のお子さんが本学に入学し、訪ねてきてくれたこともありました。また、高校訪問や教育実習の派遣指導に行った折には、教え子が立派に教員として活躍しているのを見ることもできました。卒業生がお子さんを連れて訪ねてきてくれることもあり、時の経つ早さを実感すると共に教え子の成長を卒

業後も見守ることができたのは嬉しい限りです。

今ではパソコンやインターネットなしには仕事も出来ませんが、赴任してからしばらくはパソコンもインターネットも普及しておらず、会議通知等も封書で来るような時代でした。今は便利なことも多くなりましたが、果たしてそれが本当の意味で文明の進歩と言えるのかということも時折考えます。今年度は新型コロナウイルスの発生によりオンラインで講義することを経験し、パソコンとインターネットは必需品になりましたが、ハッキング、個人情報の漏洩、SNS上でのいじめ等々の問題もあります。最近の学生達を見ていると、じっくり本を読んだり考えたりするより、インターネットを巧みに操り情報を得ている学生が増えているように感じます。これまで教育・研究に携わってきた者として、教育の意義、そして研究のあり方を考えつつ退職の言葉とさせていただきます。大変お世話になり、ありがとうございました。都留文科大学の益々のご発展をお祈り申し上げます。



桜咲く



退職にあたって 本学での日々を思い出して

比較文化学科教授 大 辻 千恵子

本学には1991年10月に着任しました。その前は、福岡市の西南学院大学に5年半いました。着任が、出産と同時期になり、産休とともにスタートしましたが、このことは文大という大学の暖かさを早々に知りえた機会でした。当時学長の白尾恒吉先生や教務厚生部長の松本四郎先生、また所属の英文学科に寛容に対応して頂きました。1993年から新設された比較文化学科に移りましたが、これも西南で国際文化学科にいましたので、私にとって自然な流れでした。片道2時間の通勤時間と夫婦二人での子育て、そして新しい職場ということで、赴任当初から子どもが小学校の中学年にあがる頃までは無我夢中だったように思います。その時期も、また大病を患った時も、比較の先生方にはずい分と助けて頂きました。改めて、大学や同僚に恵まれていたことに感謝いたします。

私の専門はアメリカ史、アメリカ研究、ジェンダー研究です。西南に初めて就職した1980年代後半、教授会はほぼダーク色一色で、女性教員はわずかでした。私は修士論文でアメリカの女性参政権運動と社会党との関係を研究しましたが、当時はまだジェンダーについて本格的に研究することも決めてはいませんでした。博士課程修了論文でも1920年代、30年代における黒人ラディカルとハーレムの労働運動がテーマでした。しかし、この教授会の様子を見て、私自身が大学という職場で研究と教育を両立させていくにはジェンダーも扱っていく必要があると強く自覚したのを覚えています。本学に着任した時の教授会も同じような光景でしたが、幸い、その前後から女性教員の数が着実に増えていきました。ジェンダー研究者も一程数集まり、2005年にカリキュラムにジェンダー研究プログラを立ち上げることができました。今から15年ほど前のことですが、当時は非常に緊張を伴う取り組みでした。1990年代、「女の子は四大なんか行かなくていい。早く辞めて帰って来なさい」と家族に言われ悩む本学の女子学生は決して少なくはありませんでした。幸い文

大の学生はよい意味で固定観念に捉われていないため、このプログラム開始時から多くが受講していたことは嬉しい限りでした。ここ十数年間、私のゼミでもジェンダーのテーマで卒論を書く男子学生も増え、プログラム修了書も得ているようです。

目下、東京五輪・パラリンピック大会について、日本のジェンダー平等が、国内外から監視されています。2017年からの#Me Too運動や2019年からの#Ku Too運動が広がり、映画界や企業界も見える形で変わりつつあります。ジェンダーギャップ指数が153カ国中121位の日本の遅々とした動きが国際的に監視され、日本のスポーツ界のみならず社会全体の古い体質の変革が要請されています。この流れが本学でも一層可視化されることを願います。

奇しくも比較文化学科創立10周年と20周年時に学科長でしたが、その記念集刊行の際、またカリキュラム改定の度に、現代世界の諸課題に向けて学際的かつ領域横断的に文化/社会研究を目指す学科のあり方を常に議論してきました。授業を準備する中で文化研究のダイナミズムを再確認することにもなりました。この学科に所属したことは、大変ではありましたが、幸運なことでもありました。教員冥利に尽きる本学の真摯な学生にも救われました。来年度から新たなメンバーが加わり学科がさらに発展することを、学科創設時からの教員として強く思うばかりです。そして文大のさらなる発展を心より願っております。ありがとうございました。



第16回「パークシャー女性史会議」(2014年)の大会ポスター
3年毎に開かれるこの大会では、大いに触発されました。



文大での5年間

比較文化学科准教授 志村 三代子

2015年に文大に着任しましたが、2016年後期から約1年間、出産・育児休暇を取得したため、本学では丸5年間勤務したことになります。このたび、他大への移動に伴い本学を退職する運びとなりましたが、研究・教育の双方において得難い経験を沢山させていただきました。特に、専任教員としてゼミを持ち、卒論の指導をすることで、大学教員として大きな気づきがありました。人文科学は正解のない学問です。学生が卒論のなかで提起する新鮮な視点に幾度も驚かされましたが、現代の映画作品にしか興味がなかった学生が、黒澤明や小津安二郎、川島雄三といった日本映画の巨匠、名匠を取り上げ、なかには卒論の内容を遥かに超えた優秀な論文を執筆した学生もいました。これまで一人の挫折者もなく卒論を完成させて送り出すことができたのも、私の叱咤激励に見事に応えた彼らの頑張りのおかげです。

都留市は残念ながら映画館が一軒もなく、映画学を教えるには不便な場所ではありました。その代わりに、2年続けて世界的にも著名な映画監督である塚本晋也さんと深田晃司さんをお呼びし、上映会とレクチャーを実現させました。このイベントが単なる上映会と異なっているのは、映画で描かれた内容をよく知る比較文化学科の先生たちが監督のトークの聞き手となってくださったことです。塚本監督の『野火』の場合、フィリピンの現代史が専門の内山史子先生、深田監督の『歓待』では、「異文化共生」及び移民問題の視点から、齊藤みどり先生のご協力を得て、映画のなかの具体的な出来事について作り手と意見を交わすことで、さらなる学びの機会を設けることができました。このような大学ならではの上映会が実現できたのも、欧米、アジア、日本の文化と社会に関する学問を網羅する、学識豊かな教員たちによって構成される比較文化学科ならではの試みであったように思います。このような専門知の集積による取り組みは、比較文化学科だけではないのも私に

としては幸運でした。加藤めぐみ先生の陣頭指揮のもと、文大の先生たちが富士山に関するあらゆる知見を結集させた『大学的富士山ガイド』の刊行もそのひとつであり、この書籍の編集・執筆にかかわることができたことも大きな収穫でした。

今年度はコロナ禍により、授業や会議はオンラインに移行し、上映会をはじめとしたイベントが悉く中止となり、不自由な生活を強いられることになりました。私自身もオンライン授業に四苦八苦してしまい、学生と顔を突き合わせて意見交換できる場がいかに重要であったのかを痛感しました。一方で映画の授業の場合は、パソコンで映像を見ながらチャット機能を使ってリアルタイムで感想を書き込んでいくことで、よりインタラクティブな学びにつながるという新たな発見がありました。この厄災を機に、大学教育のあり方が問い直され、今後も学びに対する新たな挑戦が模索され続けると予想されますが、「禍を転じて福と為す」という諺を肝に銘じて、研究・教育の両面において尽力したいと思います。

非常勤講師としてもう少しお世話になりますが、本学のさらなるご発展とご健勝を願っております。本当にありがとうございました。



『歓待』上映後のティーチイン

学校の先生になる ひとたちへ



学校教育学科教授
市原 学

多くの人は幼い頃から定期テスト、入試、それから就職の採用試験など数え切れないくらいのテストを受けてきたことでしょう。日々コツコツとまじめに勉強していれば学力も向上するでしょう。この時点ではテストは学力を推し測るためのよい指標といえます。ところが、テストの点数を上げることばかりに関心が向けられると、そこで出題されるようなことしか習得せず、結果的にいびつな学力を身に付けてしまうことになります。こうなってしまうと、テストは本来の役目から遠く離れた粗悪品に陥ってしまいます。こうしたことはテストが本来測りたいものを部分的にしかと

えられないことによって起こります。

小学校6年生の授業時間は一単位時間を45分とすると、なんと761時間にもなります。そんな膨大な時間の積み重ねをたかだか数十分で測ろうとするのですから、テストから得られる情報はどうしても断片的なものにならざるをえません。でも、だからといってすべての子どもの一挙手一投足を761時間にわたって観察するなど到底できません。ですから断片的な情報であってもいいから、テストを実施してそこから得られる得点によって子ども達の学力を“推し測ろう”とするのです。

昨今の日本はどこもかしこも“エビデンス”、“証拠”という大義名分のもとに数値データを求められています。しかし、その大義名分を絶対視し、数値を高めることに腐心するようになった瞬間にデータはその意義を失います。学校の先生になる方にはこのことを心にとどめてもらいたいと思います。高めたいのは子どもの学力であって、テストの点数ではないということを。卒業おめでとうございます。



想像力を糧に



国文学科教授
佐藤 明浩

都留文科大学で4年間、あるいは6年間で過ごされたみなさん、いまだのように学生生活をふりかえっているのでしょうか。最後の1年間は、卒業研究をすすめるにも、進路を決定するにも困難を抱えた歩みだったでしょう。いきなり始まったオンライン授業、私も試行錯誤の連続でした。それでも、Web会議システムによる近況報告のなかで、学生が自粛生活のなかで腕を上げた料理の写真を見せてくれたり、部屋で飼っているペットを出演させてくれたり、と心とむひとときもあり

ました。そして、こうした小さなエピソードを含め、オンラインだからこそできることもある、その強みをいくつも発見できました。困難にぶちあたると何とかしようと知恵が出てくる、これは人間のもっているたくましさではないでしょうか。

国文学科のみなさんは、時空を超えて作品世界に入り込み、おおいに想像をはたらかせるという体験をしてきたと思います（これを映画化するとしたら配役は…といったことを含め）。想像力の描き出したことを客観的に検証していくという側面が文学研究にはあるでしょう。想像力をはばたかせることは次なる創造の源泉です。また、その営みによってこそ、困難な現実をしたたかにきりぬけていくことができると考えます。とくに、いま、これからを生きるうえで、他人を思いやる豊かな想像力を、さらに培っていききたいものです。

どのような状況であれ、希望の光はあり続けることを信じましょう。みなさんのあらたな門出をお祝いします。

エバンズからの メッセージ



英文学科教授
Hywel Evans

This year was a difficult one for a number of obvious reasons. Particularly, with regard to graduating students, there were reasons to be concerned. Quite a few of my zemi students were unable to reside in the Tsuru area, so usual problems, such as the need for students to carry out job-hunting activities, were further exacerbated.

To be perfectly honest, while attempting to provide support to students via Zoom and Google Docs, I had absolutely no idea whether or not students were going to react badly or well. For most of the year, I can say without exaggeration that I was in a state of anxiety, imagining everything going horribly wrong! What if large numbers of students failed to complete their graduation

thesis? What if I turned out to be a pathetically dismal failure?

I was particularly concerned about this because I had loudly suggested on numerous occasions that the new technology was going to help transform university education in very positive ways! It occurred to me that I risked looking completely foolish if my zemi students' performance turned out to be weak.

In fact, my anxiety persisted until the end of the New Year vacation, when I was still expecting disaster. However, as more and more of my students completed their dissertations, I began to realize that – not only was the performance of the students up to the usual standard – the quality of the dissertations was considerably better than usual. Well-researched, well-written. Absolutely inspiring! Support via Zoom, and regular monitoring on Google Docs, seems to have had the desired result. My faith in my excellent students, and the latest technology, was rewarded.

Heartfelt appreciation goes out to my students, who now look forward to an exciting future. Keep working hard. Have a wonderful time!



最後の社会学科 卒業生を送る



地域社会学科教授
前田 昭彦

社会学科の卒業生の皆さんご卒業おめでとうございます。私は皆様のご卒業がとりわけ感慨深く、何よりもあなたがたは1987年に創設された社会学科の最後・第31期の卒業生だからです。あなたがたは社会学科が練りに練って築き上げた最良の、そして最後のカリキュラムを履修なさいました。全国的にも類例のないものだったと思います。

残念なことに地域社会学科には、あなたがたが学んだゼミのうちいくつかは受け継がれていません。それは社会学科の意志ではありませんでした。それに加え、学科・大学院づくりに貢献し、社会

科教職課程でも重要な役割を担ってきた現代社会専攻の3人の教員が地域社会学科に所属させられないということになりました。さぞかし皆様にもご不安を与えたかと思いますが、3人の研究業績は一流であることは疑いようもなく、現代社会専攻の教育研究の質は3人のおかげできわめて高いものとなっていました。そのような先生方に教えを受けたことに誇りを持って下さい。

私は環境・コミュニティ創造専攻を担当しましたが、1年全員必修の「フィールド体験」をはじめ定員60名の学生を地域での活躍に導くプログラムは、それまでの大学の授業にはないものであり、たいへん苦勞もしましたが、楽しいものでありました。環境・コミュニティ創造専攻こそ「地域」を理念に据えた社会学科のひとつの到達点だったと思います。

社会学科の卒業生の皆様、改めてご卒業おめでとう。そして、社会学科、さようなら。

(地域社会学科教授・2017年度＝最後の社会学科長)

おくることば



比較文化学科准教授
水野光朗

みなさん、ご卒業おめでとうございます。

ご卒業を祝い、みなさんに三つのことばを贈りたいと思います。

一つ目は、「置かれた場所で咲きなさい」。これは、渡辺和子さんが同名の著書で言われた言葉です。誰が悪い、社会が悪い、自分をわかってくれない周囲が悪いなど不平不満ばかり言うのではなく、自らが置かれた場所で自分なりの努力をなささい、という教えです。努力してもすぐに評価されないかもしれません。しかし、本来、努力はすぐに評価されるものではなく、努力が成果として現れ、評価されるまでには時間がかかります。短期的な、ややもすれば表層的で上滑りな成果を期待すべきではありません。

二つ目は、「知足」。「ちそく」と読みます。仏教では「少欲知足」（しょうよくちそく）と言います。あれがほしい、これがほしい、もっとお金が欲しい、高い地位や名誉が欲しいなど、欲しい、欲しいというのではなく、自らの分をわきまえて、それ以上のものを求めない、という教えです。もちろんお金がなくては生活することはできません。だからといって欲望のおもむくまま、やみくもにお金や地位、名誉を求めることは、ほどほどにした方がよいと思います。

三つめは、「いのちを大切に」。一人の人間のいのちは、一つしかありません。いのちはかけがえのないもので、他のもので代替することはできません。最近、「重症化リスクは低い」、「感染者数が極めて少ない」、「亡くなる人はごくわずか」という表現を耳にすることが多いように思います。「低い」、「極めて少ない」、「ごくわずか」であれば犠牲者が出て差し支えないのでしょうか。「一人の生命は地球より重い」。これはかつて福田赳夫総理（当時）が述べた言葉です。いのちを大切に日々を送りたいものです。

みなさんは、全国津々浦々、留学生の方も入ると、全世界から、この都留の地で学ばれました。いくつもの夢を分かち合い、季節が過ぎ去るこの速さ。ご卒業、本当におめでとうございます。



開拓者であれ



国際教育学科講師
山辺恵理子

国際教育学科の1期生として過ごした4年間、いかがでしたか。入学当初は学科事務室がまだプレハブにあったことに象徴されるように、様々な面で整いきっていない新学科でした。教員も新任ばかりで、履修登録などの作業一つひとつが手探りででした。しかし、そうした不便があるおかげで皆さんがどんどんと主体性を発揮し自律していく姿を、いつも頼もしく思って見ていました。交換留学の際にも、1期生は一度も留学生を受け入れる機会もないまま、初の交換留学生として逞しく飛び立って行ってくれました。今の国際教育学科

があるのは、皆さんのリーダーシップのおかげです。本当にありがとう。

いま皆さんは、この主体性、自律性とリーダーシップに溢れた若者が集まる小さな集団から旅立っていきます。ここで仲間と共に築いてきた常識が、常識として通用しない場にもたくさん遭遇すると思います。うまくいかないこともあるでしょう。そんな時も、どうかはみ出ることを恐れないでください。迎合して自己を見失うことなく、開拓者であり続けてください。また、皆さんは国際教育学科で、異なる文化的背景や価値観を持つ人たちと対話する力を身につけてきました。だからこそ、対話の場から早々には逃げないでほしいと思います。はみ出がちな皆さんが対話の場に存在し続け、声を持ち続けることで、世の中が少しずつよくなっていくことを願っています。

ご卒業、おめでとうございます。大いに羽ばたいてね。

修了するみなさんへ



大学院文学研究科
臨床教育実践学専攻
教授 廣田 健

大学院を修了する皆さん、おめでとうございます。志をつらぬいた皆さんを送り出すことを心から嬉しく思う一方、別れに一抹の寂しさも感じます。長い方だと六年もの月日を共有したのですね。一緒に論文を読み、調査や実践の場を共有し、新しい発見に驚き、進まない研究に悩み、突き当たった困難を乗り越え成果を出したときの喜び。これら一つひとつの場面が、まるで昨日のことの様に鮮明に思い浮かびます。それにつけても、自分は本当に皆さんの学びのお手伝いできたのか、こ

こでの学びが未来を照らす一助になったかと考えないことはありません。

明日から皆さんはここで得た知識と勇気をもって新しい舞台へと踏み出すことになります。みなさんの学びの場であった大学・大学院は多くの人々との思いや負担によって成り立つ組織です。ここで得た知識は、あなた一人のものではありません。あなたのことを支えてくれた有名・無名の数々の人々の思いに応え、ここで得た高い志に裏打ちされた高度の知識や技術を生かし新たな場でもご活躍ください。

最後に教育学を学ぶ者の一人として皆さんに次の言葉を送ります。

「教えるとは希望を語ること、学ぶことは誠実を胸に刻むこと」。

教師に限らず知識や経験を後輩に伝えることは今後多くなると思います。その時、相手と真摯に向き合い、認め合い、相手の成長に未来を託すことができる、そういう人になってください。



人とのつながり



初等教育学科4年
沖 拓実

都留に来てから4年が経ち、卒業の時期を迎えました。4年間という時間はとても長いものを感じますが、来たばかりでこの地のことが何も分からなければ、頼れるような人もいない不安な時期が昨日のこのように思い出されます。

私はソフトテニス部に所属しており、3年次には主将として部活動を牽引していくという重要な役職を任されることとなりました。それまで集団の上に立つ経験はなかなかなかったので無事に責務を全うすることができるか非常に不安を感じたことを今でも覚えています。しかし頼れる先輩方やついてきてくれる後輩、そして何より頼れる同



部活の仲間と

輩。多くの人たちに支えられながらもなんとか1年間勤めあげることができ、人とのつながりの大切さを身に染みて感じました。部活動をより良いものにしていくため時には本音でぶつかり合うこともありましたが、その日々があったからこそ本当に信頼できる仲間と出会えたと実感しています。この出会いや仲間との経験が私を精神的に大きく成長させてくれたと断言することができます。

都留で得たこと、この地での出会いに感謝しながら次のステップへと進んでいきたい。4年間、本当にありがとうございました。



あかずして別るる 袖の白玉を



国文学科4年
後藤 紗帆

大学では沢山の出会いがありました。

1つは沢山の和歌との出会いです。講義やゼミの中で、三十一文字の中に詰め込まれた様々な古人の感情、古人の見た景色、古人の抱いた願いに出会うことができました。また、中世文学ゼミでは『百人一首宗祇抄』を通して和歌の調べ方から向き合い方まで丁寧に教えていただきました。佐藤明浩先生、本当にありがとうございました。大好きな古典に、そして大好きな和歌に4年間向き合うことができ、とても幸せでした。

2つ目は競技かるたです。かるたに関しては全くの初心者だった私ですが楽しくて優しい先輩方、経験者の友人たちに一から教わり、大学選手権には3年連続で参加しました。静寂に包まれた



近江神宮での大学選手権

畳の上で繰り広げられる刹那の戦いは、競技かるたでしか経験できないと思います。かるたサークルあまつかぜで、非常に充実した時間を過ごすことができました。

大学で出会った先生方、先輩、友人、後輩、そして今まで支えてくれた家族、和歌、競技かるたのおかげで、今の私があります。本当にありがとうございました。自分の「好き」に囲まれた都留文科大学での4年間は宝物です。

「君が形見と包みてぞゆく」

夢と都留文科大学



英文学科 4年
Caldito Mathew

英文学科の代表として6年間の成果を英文で失礼します。

It has been about 6 years since I started living my college life in Tsuru. Looking from the present to the past, all I can say is that without Tsuru University I could have not achieved my dreams.

At first, I wanted to enter Tsuru University because of their exchange program with the University of California. I was interested in this program because I heard from my seniors, who were Tsuru University students, that I will be able to take world-class courses (also not provided in Tsuru University) from world-class professors. This was a great opportunity for me since my life goal was to create a company that will provide a better living for the people in the future. Being able to take courses of entrepreneurship, business, and other related courses will for sure bootstrap me on reaching my goal. This was the main reason I wanted to enter Tsuru University, besides my parents forcing me to only go to Tsuru University at that time.

2 years passed after entering Tsuru University, I was lost. I was not the person that I used to be when I was in high school. But thanks to the great communities that I was able to be a part of at



ESS 部と交換留学生とのハロウィンパーティー

Tsuru University, helped me redirect my path to my success. The International Affairs community at Tsuru University was the best thing that happened for me. I was able to meet and create strong relationships with great people who influenced and helped me to become the person that I wanted to become. All of this could not have been possible if it was not for Tsuru University and especially for the staff in the International Affairs Center. I would not have been the person I am right now.

With the knowledge that I have gained from my professors, the connection that I have made with exchange students, classmates, staff, and especially the friends I have met in Tsuru as well in UC Davis, I am reaching my goal closer day by day. From the startup that my friends and I built in the US, I hope that we can make it successful soon and bring our services to Japan so that I can give back to the society that gave me when I was in need of help.

Thank you to my professors, the staff in the International Affairs Center, the international dormitory staff, friends, family, and last but not least Tsuru University for helping me grow and make a better version of myself. I hope to see you soon.



4年間で得たものは



社会学科
現代社会専攻4年
藤岡寿々加

故郷から遠く離れた都留に来て、気づけば4年もの月日が流れていました。高校までに比べて縛られるものが少ない「大学」という環境と、待ちに待ったはじめての一人暮らしに心が弾んだ入学当初の感情を今でも覚えています。

大学では、以前から関心のあった分野を継続的に学び、卒業研究につなげることができただけでなく、あまり関心のなかった分野にも挑戦することで、今までの自分にはなかった視点や価値観を取り入れることができました。

そして、この4年間で得たもののなかで最も大きいのは、やはり「人との縁」だと感じます。一人で過ごす時間を何よりも大事にしたいと考えていた私は、最初の頃は自分から誰かと親密な関係を築こうとすることはほとんどありませんでした。しかし、サークルや



かるたサークルのメンバーと、近江神宮にて

ゼミ、アルバイトなどを通じて出会った人たちと仲良くなり、新たな出会いの楽しさや面白さ、そして新たな自分の一面にも気づくことができました。

都留での生活を通じてできた思い出や人との縁は、私にとってとても大切なものとなりました。4月からは新たな地で新生活が始まりますが、都留で過ごした時間が私を支えてくれると思っています。この4年間、私に関わってくれたすべての人に感謝を伝えたいです。ありがとうございました。



出会いと学びの4年間



社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻4年
十枝内康哉

入学してからの4年間の月日はあっという間に過ぎ、あと数ヶ月で卒業する実感がなかなかわかない。今思えば4年前に地元を離れ、遠い都留で一人暮らしを始めたことが懐かしく感じる。大学の講義では、教職課程の講義が充実しており、教師になるために専門的な知識を学べることができた。また、環境社会学ゼミに所属し、四日市にフィールドワークに行き四日市公害について深く学ぶことができた。ゼミで学んだことで一番の収穫は、実際に現地を訪れ、「現地の生の声」を大切にすることである。

大学生活では、いくつものかけがえのない思い出ができた。特にハンドボール部で過ごした時間



思い出の写真

は大きい。長野県や群馬県など遠方にも練習試合や大会に出向いたり、冬の寒い体育館で朝練したりとお互いを高めることができたと感じる。練習後に松鶴やじゅーりでご飯を食べたり、オフの日に出かけたりなど様々な思い出ができた。またいつか、みんなでハンドボールをしたいと思う。大学で約3年間やり遂げることができたのは、紛れもなくみんなのおかげである。

都留文科大学で学んだことに誇りを持ち、人との繋がりを大切にしながら生きていきたいと思う。お世話になった神長唯先生とゼミの同期、友人、家族をはじめ、お世話になった全ての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

「大人になる」ということ



比較文化学科4年
姜 雪 純

文大は本当にふわふわな泡に包まれたような平和な学校だった。優秀な同級生に囲まれ、親切な教授方にも可愛がられ、充実したカリキュラムで勉強できた私は平穏に卒業するのだと思っていたが、コロナウイルス感染が世界規模で蔓延したことにより、私の平和な大学生活が一変した。

私だけでなく、全ての同級生にとっての大きな変化であった。優しく包んでくれていたバブルは見えないウイルスにはじかれ、目の前に現れたのは、冷酷な社会の鏡が映し出すリアルだった。困惑、迷い悩みながら挫折し、それでも果敢に前進する同級生達を見て、校門の外へ出ると、私達は本当に「大人」になるのだと実感した。



思い出の写真

大人になるのが不安だったが、もう今は怖くない。生老病死は生物にとっての自然過程であるから、いつ命を失ってもおかしくない環境の中で、どう勇気と知恵を生かし、逃げることでできない困難に直面してきたのかを後世に伝え、生命を次世代へつなぎ渡す役割を、今まで沢山の大人が命懸けで担ってきた。だから、命は点ではなく、線である。人間はきっと螺旋のように、新しい事にぶつかる度、浮き沈みしながら横に伸びて生き、円を描いていく。

「子供は一瞬だけど、大人って長い」。だから長い人生をかけてゆっくりいい大人になっていけばいい。外れても、廻りながらいつかはまた繋がっていくのだと信じて、私もこれから大人として生きていく。

私の身につけた武器



国際教育学科4年
平 出 熙 八

桜降るなかオレンジロードの急勾配の坂を履き慣れない革靴で登り、足を痛めながら参加した入学式の日を昨日の日のように鮮明に覚えている。その日から4年が経過し、振り返ると、自分の成長をよく実感できる。

他学科の学生からは国際教育学科は英語を勉強している学科だと思われがちだが、個人的には違うと思う。国際的な人材になることが国際教育学科の目標で、英語は副次的に必要なスキルだと考えている。つまり英語はできて当然みたいな風潮があった。だから英語が苦手な私にとって、授業に慣れるまでは苦労した。英語が得意なクラスメートや留学生と英語でグループワークをする際は、話の主導権を完全に握られ、言いたいことが言えず黙り込んでしまうことが何度もあった。そういった状況の中で自分に何ができるのか考え、始めは積極的にプレゼン用のパワーポイントを作ることから始めた。最初は誰でもできる簡単なことからのスタートだったが、4年



学科の仲間と

間続けていく内に今では必要に応じてリーダー役・サポート役を使い分けれるようになった。このようなグループの中で自分が何をすべきなのか・どんな役割を担うべきなのか考えて実践する力は、私の最大の武器になった。このスキルは英語が苦手な私だからこそ身につけることができたと思っている。

4年という期間は長いようであつという間だった。勿論勉学には励んだが、お叱りを受け、それらから様々なことを学んだ。これからの人生でも良いこと・悪いことがそれぞれおこるだろう。その中で国際教育学科で学んだ何からも学び続けることを継続し、Life-Long-Learnerであり続けたいと思う。

旅立ちに寄せて



大学院
国文学専攻
田浦佳奈

大学、大学院と都留文科大学で過ごし、実り多い日々でした。入学以来、勉学や部活動に励み、友人と過ごした6年間は、ほんの一瞬のように感じられます。

和歌の、三十一文字に複雑な情景や心情を表す表現技法の豊かさに私は惹かれます。大学で、そして大学院で学んだ上代の文学世界の普遍的な美しさ。それに加え、現代の文学まで幅広い授業をしていただき、その一つひとつが先生方との距離が近いこともあり、新たな知識やより深い考えを得る貴重な時間でした。今、私は学ぶことの困難さと高い価値を自分の財産にできたことに深く感謝しています。

個人的なことですが、大学院では同学年の菅野



同専攻の後輩たち

愛美さんにいつもお世話になりました。授業も日常のこともしっかり者の彼女にいつも相談しており、おかげで大学院生活を楽しく過ごすことが出来ました。特に修士論文執筆中は菅野さんといつも励ましあい、友人のありがたさを実感しました。心の支えとなってくれた国文学科の先生方、菅野さん、本当にありがとうございました。

大学院の先輩、後輩、大学の事務の方々にも本当にお世話になりました。都留文で過ごした全ての日々に心からの感謝を申し上げ、旅立つ言葉といたします。ありがとうございました。



6年間を振り返って



大学院
社会学地域社会研究専攻
井草桂太

都留での6年間はあっという間でした。なかでも、大学3年から大学院までの4年間は恐ろしいスピードで時間が過ぎていったように思い、それほど濃い時間を過ごさせて頂いていたのだと振り返って感じます。

そして、この濃い時間は大きく分けて2つのことに費やした時間でもあります。一つは「部活動」です。なかでも同期との繋がりはかけがえのないものとなりました。

もう一つは「勉学」です。大学院にて、私のやりたかった研究を行う機会を頂き、その中で指導教官の先生をはじめ、多くの先生方の助力を頂きました。



部活動の仲間と

大学院にて先生方や同級生と交わした議論はどれも刺激的で、かつ私の想像を超えたものでした。先生との一対一の講義など、学部生のときにはなかった貴重な経験のなかで、研究者の卵として接して下さった先生方には本当に感謝しています。

最後になりますがこの場を借りて、大学院に進ませてくれた家族、練習や試合を通じて共に高め合った部活動の仲間、様々なことを語り合い、論文でつまづいた時にはアドバイスをくれた大学院の同級生、そして、温かくも丁寧なご指導を頂いた先生方に、改めて深く御礼申し上げます。

Being a student again



大学院
英語英米文学専攻
Jotham Kittos

Six years ago, I first came to Tsuru University as a teacher. Before that I had been teaching in various places including English conversation schools and cram schools here in Japan, as well teaching maths, ESOL and ICT at colleges back home in the UK. Although these experiences have helped me be as good a teacher as I could be, I always felt that there was something missing from my repertoire. When given the chance to better myself academically and to have a better understanding of the way students learn, I jumped on it.

Over the last two years I have not only learnt about the subject of linguistics, the theories of learning I was already using in the classroom, the importance of understanding the differences in the way we speak to



Zoom classes

each other, but also what it is like to be a student in Japan.

Although this last year has been hard to struggle with the difficulties of the Coronavirus, as an optimist, I see my experience as being lucky as I have been able to see both sides of the situation; as a student and as a teacher. Hopefully, in the near future, we can overcome the problem and look back and see what we have all learnt, and move forward. I'm looking forward to getting back into the classroom and seeing how much of what I have learned, I can put into practice.

It has been such a wonderful experience with such great classmates and I have a newfound respect for the professors at Tsuru University.



二度目の卒業



大学院
臨床教育実践学専攻
久留見満貴

ちょうど30年前に卒業した都留文科大学で、大学院生として学べたこの二年間は毎日が楽しく、発見の連続でした。

この2年間で学べたことは、まずは現在の日本の教育、教育心理、教育制度、親子関係、そして学習方法でした。リカレント教育を推進している本大学院の制度のおかげで、教鞭を取っている大学の授業を行いながら、大学院の授業を受講することができました。大学院のカリキュラム内容は外国人留学生に20年あまり日本語を教えている私にとっては、分野も異なり未知の領域ではありましたが、そのことが返って日本語教育の既成概念と自分の体験主義に基づいた授業に陥っていた私の教育観に新風を吹き込ませたと思います。



実践授業を行った学生と共に

次に、私の臨床実践研究についてです。これまで行っていた授業内で感じた学習内容、方法に対しての大きな疑問を払拭したいと思い、新たな実践を行うために考えた授業計画案のもと授業をおこない、鶴田先生をはじめ様々な先生、そして院生達からの新しい視点を得て、新しい学びの方法を知る事ができました。一人ではなく多くの方のご協力と支援のおかげです。私は都留文科大学で2度も学ぶことができ、本当に幸だと思っています。

初等教育学科 令和2年度卒業論文題目

新井 仁ゼミ

- 鈴木 彩加 空間概念を豊かにする算数・数学教育の考察
—展開に焦点をあてて—
- 鶴田 智美 特異的算数障害の実態と指導の在り方
- 福重 智也 定幅図形を題材とする算数・数学の授業の検討
—ルーローの三角形の図形の性質から—
- 古川 由貴 オリガミクスを素材とした数学教育
- 細田 功也 ポリドロンを活用した算数教育
- 松原 章子 パターンブロックを用いた算数の授業づくりに関する研究
- 安岡 巧 そろばんの教育的価値について
- 山口 真由 数独に潜在する数学と教育における活用
- 油井亜里紗 単位学習における算数教育的価値
- 渡邊 徹平 小数の計算の困難性と指導のあり方

石元 みさとゼミ

- 小林健太郎 宮沢賢治「やまなし」の授業構想
—情景描写を中心として—
- 飯尾 南美 日記文学として読む『夜は短し歩けよ乙女』論
- 池田 彩乃 三浦しをん『風が強く吹いている』論
—強く吹く風になりたい者たちの思いを読む—
- 瀬川 奈那 カルロ・コッローディ『ピノッキオの冒険』論
—〈いたずら〉をキーワードに『ピノッキオの冒険』を読む—
- 関戸 祥子 吉本ばなな『キッチン』論
—「文体」と「描写」についての考察—
- 田邊香菜子 新美南吉『ごんぎつね』の授業
—〈悲劇〉を理解する—
- 松下 文乃 棕鳩十「大造じいさんとガン」の授業
—子どもの「理解力」を高める授業—
- 松宮 凌我 〈家族〉から読み解く『銀河鉄道の夜』
—父親を中心に—
- 安田麟太郎 表現から読み解く『夫婦善哉』

市原 学ゼミ

- 石田 恭也 多項方程式による自動的共感性の抽出
- 石渡 純奈・上岡 亜子・浦田さおり 女性の化粧に及ぼすコミュニケーション不安の影響
- 沖 拓実・加藤 大地・小林 柊哉 多項方程式による自動的共感性の抽出
- 森垣 愛子 音楽による気分調整効果について

内山 美恵子ゼミ

- 大原 美月 山梨県南アルプス市御勅使川扇状地の水害による地形と土地利用の変遷
- 渋谷 郷介 房総半島の気象災害を例とした気象防災教育
- 藤井 諒佑 富士山火山災害における地域コミュニティによる防災
- 横川 昂奈 富士山須走期スコリアの形態的特徴
—特に R1・R2 スコリアについて (その2) —
- 吉澤 成南 都留市内の桂川を中心とした地域における地下水変動の水文地質学的考察

岡野 恵司ゼミ

- 大畑 済 n と $2n$ の間に素数がある
- 新治日菜子 集合代数における確率論
- 森 有季良 立方体の対称性について
- 柳川 京平 交代群と対称群の可解性
- 山中 尊広 冪乗和と関・ベルヌーイ数
- 吉田 航也 整数環の構造

春日 由香ゼミ

- 滝口 真由 ICTを活用して交流する国語科授業
- 阿部聡一郎 小学校国語科「読むこと」の授業における「問い」の研究
- 小山亮太郎 小学校国語科授業におけるデジタル教科書の検討
- 土屋 優太 小学校国語科における これからの「短作文」指導
- 松島 亜門 小学校国語科授業における机間支援と助言の研究
- 望月 映里 小学校国語教科書の教材と授業の検討
—『ちいちゃんのかげおくり』と『アップとルーズで伝える』を中心に—
- 森下友莉乃 読解力をつける国語科指導とフィンランド教育

加藤 優ゼミ

- 大久保育生 サッカーにおけるパントキックの指導法について
—横蹴りの指導に着目して—
- 金子 直史 学校運動部活動の地域移行化が実現できなかった要因と背景
- 菊地 健斗 都留文科大学男子アイスホッケー部のスケート能力と身体能力の関係
- 鈴木 悠香 小学校運動会の地域差について
—一日野市と都留市の比較—
- 田島由莉菜 得点期待値からみるチームの傾向と今後の課題
—都留文科大学女子バスケットボール部の場合—
- 藤本 涼平 スポーツにおける道具・ルールの違いについての考察
- 三井杏里紗 スポーツアニメや漫画がもたらす競技人口と競技興行収入への影響
- 渡邊 美穂 スポーツがもたらすストレス耐性への影響

瓦林 亜希子ゼミ

- 泉 優太 自然科学的視点からみるフレネたちの「自然方式」の学び
—学び手を選ばない多様性に富んだ公教育の実現に向けて—
- 泉 琉己 子どもの権利を実現する「キャリア教育」
—本来の公教育の在り方と「子ども観」の視点から—

- 岡野さくら 自然な問いから広がる学び
—“てつがく”対話の可能性と公立小学校での実践—
- 小林 友 真の「平等教育」の実現に向けて
—「公平性」を保障する個別教育の必要性—
- 颯田 樹 生活綴方の「読み合い」と自由テキストの発表における教育的価値
- 本橋 泰紀 本来の「学力」と卓越性の実現に向けて
—すべての子どもを伸ばすためには—
- 渡邊 杏介 日本の公立小学校におけるフレネ教育の実践方法とその意義
—実践から教育を変えていくために—

上原 明子ゼミ

- 天野 琢斗 小学校英語教育における文字指導
- 遠藤みのり 児童期における英語の音韻認識の重要性
- 萱沼 美結 フィンランドの教育についての考察
- 菊地 慎平 小学校英語教育における CLIL の意義
- 瀧野 日和 小学校英語教育における絵本の活用
- 畑 佑弥 マザーグースと小学校英語教育
- 村上 卓弥 小学校英語教育におけるフォニックス指導

佐藤 隆ゼミ

- 大木 乃愛 「今」を生きる教師のしごとと働きやすい職場について考える
- 大宮 惇暉 北海道の実践から地域教育の可能性を考察する
- 西郷 龍真 「学校崩壊」と言われる今日の教育現場
- 手島 藍 日本の教育格差と無償教育
- 寺井 瑞穂 コロナ禍で見つめ直す主体的・対話的で深い学び
- 林 茉璃 学級通信から見る保護者・子どもとのつながり

清水 雅彦ゼミ

- 足羽 萌 音楽を「演じる」ときの意図伝達
- 尾崎 友唯 日本の舞台芸術の成長
- 小澤 果歩 日本と海外における音楽教育の比較
- 小坂 梨紗 特別支援教育における音楽の可能性
- 高橋 麗生 ガエターノ・ドニゼッティの生涯と オペラ「愛の妙薬」についての考察
- 和田 美里 小学校教育における日本伝統音楽

十川 菜穂ゼミ

- 池上 彩佳 音楽と感情の心理学的研究
- 上間菜々花 なぜ人は音楽を好むのか
- 小野寺 愛 BGM の活用について
- 片山 壮太 フランツ・リストの生涯と音楽について
- 吉田 優里 音楽の効果を生かした教育現場における実践

平 和香子ゼミ

- 朝倉 萌衣 インドネシアにおけるパティック文化に関する研究
- 浦田 創平 大学生における味覚障害と食生活に関する研究
—亜鉛摂取量の関連性—
- 桂嶋 優帆 大学生の枝豆嗜好性とその活用について
- 国分つぐみ 小学校における食育指導に関する研究
- 本田 如奈 大学生におけるエコ意識及び行動に関する研究
- 山田 菜央 男性保育士の現状と課題
- 山田 実波 小、中学校における栄養教育

竹下 勝雄ゼミ

- 鈴木 大輔 論理的思考力を高める図画工作科指導についての一考察
—プログラミング教育からのアプローチ—
- 八巻 凌 鑑賞活動と対話による図画工作研究の今後の在り方について
- 井森 遥 図工・美術教育における漫画表現について
- 齋藤 咲花 描画と心理の関係性についての一考察
—図画工作教育におけるアートセラピーの活用—
- 櫻庭 雄大 子どもの「好き」を持続させる図画工作科の授業づくり
- 佐藤明日香 「生きる力」を育てる授業づくりについての一考察
- 新見 広大 小学校教育における持続可能な社会づくりの担い手を育むための図画工作の特徴をいかした学びについての考察
- 竹綱 美咲 自己肯定感を育むための鑑賞活動について
—児童に対する鑑賞活動の在り方について考える—

筒井 潤子ゼミ

- 伊藤千冬光 ネット社会と自己肯定感
—ネットトラブルの事例から考える—
- 内海 里彩 生きづらさを感じる子どもについて考える
—子どもを多角的に見るために—
- 太田 和泉 PTSD（心的外傷後ストレス障害）の実態
—消せない子供の頃の「トラウマ」—
- 今野 祐希 インターネット上でのいじめについて考える
—新たなコミュニケーション手段を豊かにするために—
- 白木 冴枝 子育て支援
—子育ての現状と愛媛県西条市の実例から考える課題とこれから—
- 土橋 月 人の心を癒す動物たち
—アニマルセラピーの事例から考える—
- 成田さつき 障害者のニーズに応じた支援の在り方
—障害者支援の現状と課題—
- 深沢 里彩 場面緘黙児への支援
—教師の立場から支援の在り方を考える—

堤 英俊ゼミ

- 海野嵯矢佳 依存することとキャリア形成
川口 美聡 身のゆるむ学級づくり
—ストレッチ活動を起点にして—
河邊 拓野 授業の導入における小話に関する研究
白田 大 学級の「普通」を問いなおす教育実践
高橋 杏実 子どもの「怒りと向き合う力」を育む
—せんせい日記とこども日記の交流を通して—
長井 奏海 不登校支援と学級経営
—席替えの実践を通して—
松谷美千江 特別支援学級における「話す」指導に関する研究
村松 夏帆 存在を承認しあう学級づくり
—交流授業を起点にして—

鶴田 清司ゼミ

- 持増 一秀 「学び合う教室文化」についての研究
五十嵐美竹 日本のこれまでの性教育これからの性教育
兼松 結衣 子どもの自尊感情を育てる教育方法論
菊地 水晶 学習塾と学校のこれからのあり方
城田かな枝 地域教材を活用した授業づくり
—「主体的・対話的で深い学び」のために—
関根真結子 語彙力を向上させる学習
二村 美華 ICT教育がもたらす効果と問題点の解決
—岐阜県のICT教育に取り組むための考察—
松永 汰洗 特別活動の現状と望ましい在り方
—社会で生き抜く力の育成—
山口 終 言葉が育てるコミュニケーション力
—未来を見据えた教育の在り方—

寺川 宏之ゼミ

- 相澤 舞紀 スチュワートの定理
浅川 実里 フランク・モーリーの定理について
小田切 梓 パスカルの三角形
小山 航也 ピタゴラスの定理と三角形
政本 愛夏 ユークリッドの『原論』の公準について

鳥原 正敏ゼミ

- 川口 優佳 勉強から脱却し学びを問い直す
—世界放浪旅の経験をもとに—
秋山 琴未 学習者主体に関する一考察
—これまでの図画工作を通して—
浅田 健汰 かかわり合う力を育む図画工作
植村 伽宙 発達段階がちがうこどもたちがたのしむ
造形活動に関する一考察
大嶋 愛乃 図画工作の意味を考える
—自己と他者の価値観を足場として—
松橋麻弥乃 図画工作における「まね」に関する一考察

中川 佳子ゼミ

- 高橋愛舞希 就職活動におけるストレス
—自己効力感との関係から—
天野優梨香 大学生の愛着スタイルと学校適応の関連について
岡田 映里 自身のスポーツ経験と子どものスポーツ参加への考え方
清水 夏帆 障害者を同胞に持つ双生児の自己評価と自尊感情
田中 快尚 発達障害の支援：ASD児の学習支援を通して
成田倫太良 異性友人関係における親密さと共有様式との関係
山崎真里恵 大学生の学校生活適応感における自己肯定感、
対人関係への影響
萬家 江美 自認するキャラの有無と賞賛獲得欲求にお
ける友人関係・自我同一性との関連

西本 勝美ゼミ

- 大神田 匠 豊かに働くことの実現
—過労死事件が伝えたものとは—
大竹 陽平 地域づくりの拠点となる学校
—小さな学校の可能性に着目して—
大庭 有貴 インターネットと共存していく
—SNS依存に見る若者のコミュニケーション—
國安 裕介 自分の力が発揮できる社会へ
—雇われない生き方の追求—
関 優斗 やりがいのある教員の働き方を探る
—組織として支え合う学校の在り方とは—
松久 拳也 子どもたちに『体験』という教育活動を
—自然体験に関わる子どもの成長と大人の
視点—
三浦 藍 生きづらさを分かち合う
—ひきこもり支援の研究を通じて—

平野 耕一ゼミ

- 阿久津このみ 放射線教育について、小学生の興味を喚起さ
せる教材開発
池端 美菜 物体の落下と、終速度について
里見友莉那 僻地教育と知的障害児のための理科教育
多田良聖南 理科教育における興味の観点からみた実験
の有用性と、興味を深める効果的な指導につ
いて
東 采耶花 理科離れの現状と学生アンケートから考え
る効果的な可視化教材・授業についての研究

廣田 健ゼミ

- 市毛 遙 子どもの貧困対策推進法の有効性に対する
一考察
風間 希 子どもの参画保障システムとしての三者協
議会の意義と課題
—長野県辰野高校における三者協議会の事
例をきっかけとして—

川又 光 花輪ばやしに見る地域教育の有用性
 原田 寧々 母子保健と児童虐待
 村田 篤哉 いじめを生まない学級の在り方
 元木 菜緒 対人関係の闇から子どもたちを救うために
 —一人一人の個性を守る教師の在り方—
 山本 匠 色覚異常の子供が安心して学べる環境の保障について
 —教師の教育的働きかけの視点から—

別宮 有紀子ゼミ

北尾 駿 東京都東久留米市落合川に生息する水生昆虫を利用した教材研究
 鈴木 貴大 バランスドアクアリウムを応用した教材の開発
 —生物と環境の関係性に対する理解を深めるために—
 藤島 悠太 ホウセンカの種子散布を教材とした授業づくり
 —種子散布から「生命の連続性」を考える—
 松江 右聖 都留文科大学周辺に生育するバイカモの乾燥ストレス応答に関する研究
 —水位変動によるストレスはバイカモの成長に影響を与えるのか—
 柳澤 良太 絶滅危惧植物ナガエミクリの発芽条件の解明
 —ミクリ属の保全のために—

邊見 信ゼミ

榎本 明香 鹿児島県における複式学級の学習指導法
 —ICTを活用した効果的な学習指導—
 大岡明日香 子どもの変化に対する教師の眼差しと東日本大震災
 黒澤ほのか 21世紀を生きる子どもたちへ向けた思考力を育む授業
 —木下竹次における「発動的学習」論に注目して—
 曾根 海人 小1プロブレム
 —山梨県の現状—
 三浦 悠生 小1プロブレムに対応する学級づくり
 望月 幹太 初任者研修における学級経営力の育成と課題

水口 潔ゼミ

赤川 周平 ラグビーにおける勝率向上に起因するタックルの研究
 —山梨県 T 高校過去のデータより—
 新井穂乃佳 体育に対する意識調査
 —都留文科大学初等教育学科・学校教育学科の学生の場合—
 石田 佳子 過去の運動経験が日常生活における心理的対処能力に及ぼす影響について
 —都留文科大学の学生を対象として—
 稲垣 聡 男子走幅跳における助走が跳躍に及ぼす影響
 —男子大学生走幅跳競技者 S.I の場合—

岩松 哲平 都留文科大学男子ソフトテニス部のゲーム分析
 —ランニングボレーに着目して—
 及川 太希 ソフトテニスシングルスに関するゲーム分析
 —スライスショットに着目して—
 真島 陸斗 鉄棒運動における「運動の言語化」の影響について
 —都留文科大学学生 Y.K さんの場合—
 豆生田舞鈴 きょうだい構成や出生順位が運動に及ぼす影響
 矢作 亜優 ソフトテニス女子ダブルスのスマッシュに着目したゲーム分析
 —都留文科大学の場合—

武蔵 由佳ゼミ

安藤 樹 現代の性役割と教育との関連
 上田穂乃香 愛着障害が大学生の恋愛タイプに及ぼす影響
 川下 未紗 大学生の友人関係とほめとの関連
 櫛部 嘉洋 自尊感情を育てる教育実践
 —基本的自尊感情と社会的自尊感情の視点から—

柳 宏ゼミ

石垣やよい 筋肉テープと運動パフォーマンスの関係
 —KT テープを中心に—
 浦山 和泉 インソールと運動パフォーマンスの関係
 —B-TR インソールを中心に—
 小口 亜美 社会人のスポーツ活動実施に対する動機付けの研究
 高橋 伶奈 バレーボール競技のサイドアタッカーに求められる資質についての研究
 —高校生・大学生女子の場合—
 菱田 捷月 バレーボール競技活動に対する動機付けの研究
 —COVID -19 流行との関わりに着目して—

山森 美穂ゼミ

尾崎 力斗 空気と水の押し縮められ方の違いがよく理解できる授業
 穴水 咲 探究的に学ぶ力を伸ばす「調べ学習」
 —コピー学習からの脱却—
 飯塚 茉佑 科学絵本を活用した生活科の活動
 —理科への接続を目指して—
 岩瀬 輝 小学校における再生可能エネルギー学習
 高石 健斗 「過大視本能」「単純化本能」に陥らないための小学校授業
 —SDGs 教育を題材に—
 西本 雄紀 「とける」の多義性に着目した「もののとけ方」の授業

国文学科 令和2年度卒業論文題目

上代文学

鈴木 武晴ゼミ

- 伊東虎太郎 日本霊異記の動物
石見 勇貴 文献から探る古代出雲の役割
大杉かれん 文献にみる上代の神社
一出雲大社を中心に—
小笠原 希 上代文学における「結界」
小笠原有紀 『日本霊異記』の動物報恩譚と仏教
柏田 琴音 万葉集における赤色と現代の赤色との違い
栗田 亜美 『日本書紀』の色彩
武田 結 上代蝦夷考
中村 真奈 上代における桜と梅
濱島 若奈 上代文学における異類婚姻譚
前村 海晟 古来日本から伝わる「狐」の存在
宮澤 美有 上代文学における数字
山石 卓人 『万葉集』恋歌の分析
山田 真愛 上代文学の説話から見る蛇及び龍

中古文学

長瀬 由美ゼミ

- 秋山 景子 『源氏物語』における『竹取物語』の影響
木下 莉緒 『源氏物語』における光源氏と頭中将の関係性
島倉 也実 『伊勢物語』と白居易詩
一業平歌を中心に—
鈴木 綾乃 『源氏物語』における手紙
一紙の色に着目して—
寺尾 優花 『源氏物語』六条院の女衆とその意義
寺脇 知里 『源氏物語』における理想の女性像
外川みさと 『源氏物語』における霧
中平 佳那 青谿書屋本『土佐日記』における仮名「ん(无)」字について
本田 藍理 『源氏物語』における光源氏を称賛する表現
間瀬 智祐 菅原孝標女と『源氏物語』について
横手 彩花 『源氏物語』における「雨夜の品定め」の意義
吉田 美雪 薫・匂宮の人物造型とその芳香について
—「かをる」「にほふ」関連語を中心に考える

中世文学

佐藤 明浩ゼミ

- 天ヶ瀬恭子 古代から中世にかけての和歌における「酒」の表現の変化について
功刀 弾 藤原定家の本歌取りにおける表現について
後藤 紗帆 懐旧歌の考察
一月を詠んだ歌を中心に—
境 祥太 「八代集」の「恋歌」におけるジェンダー観
佐藤 環 中世文学に描かれる天狗像
高橋 文人 遠島百首から読み取る後鳥羽院の心情
永峯 千尋 「平家の物語」の語りについて
一世阿弥の謡曲作品を中心に—
栗山 萌 時代が下るにつれて被枕が増加する枕詞

近世文学

松原 哲子ゼミ

- 宮澤 卓杜 『平家女護島』における俊寛のこころ
森田日菜子 『平家女護島』二段「鬼界が島」考
—千鳥の言動に着目して—

近代文学

古川 裕佳ゼミ

- 小澤美由紀 徳田秋声「蒼白い月」論
織田 莉奈 坂口安吾「私は海をだきしめてゐたい」論
北原 麻衣 谷崎潤一郎「熱風に吹かれて」論
小畑 実穂 夏目漱石『永日小品』『モナリサ』論
成田 聡香 江戸川乱歩『黒蜥蜴』論
西村 泉 松浦理英子「最愛の子ども」論
平山 紗衣 芥川龍之介「尾生の信」論
堀内 美優 佐藤春夫「のん・しやらん記録」論
前田 玲 夢野久作『瓶詰地獄』論
間部 夏未 堀辰雄『菜穂子』論
山崎 唯 小酒井不木「痴人の復讐」論
山元 寧々 三島由紀夫『美しい星』論
依田 悠里 室生犀星「不思議な国の話」論

近代文学

野口 哲也ゼミ

- 梶本 典那 豊島与志雄「変な男」論
—都会生活と疑似家族—
植田 楓佳 太宰治「ヴィヨンの妻」論
一笑う弱者—
小澤 百萌 泉鏡花「唄山心中一曲」論
—心中をかたること—
小田島実沙 尾崎紅葉『不言不語』論
—家族を結う契り—
笠原 悠生 太宰治「道化の華」論
—「失敗」したフィクションの行先—
久島つかさ 泉鏡花「天守物語」論
—境界の世界—
久保田千尋 小川未明「赤い蠟燭と人魚」
—北の人魚と南の読者—
倉又 寛弥 「S・カルマ氏の犯罪」における自己の喪失
—壁がもたらすもの—
新坂美乃里 江戸川乱歩「白昼夢」論
—「写実」と「幻想」の共存—
高垣 萌 梶井基次郎『桜の樹の下には』論
—健全であるという権利—
中村 萌里 太宰治「駆込み訴へ」論
—「裏切り者」に与えられた視線—

近代文学

田口 麻奈ゼミ

- 井出 怜奈 谷崎潤一郎『痴人の愛』論
鷹塚 友紀 寺山修司『身毒丸』論
—母子を巡る因果と変遷—
中島 叶絵 森絵都『カラフル』論
—社会問題とヤングアダルト文学—
橋本 夏子 村上春樹「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」論
藤谷 小春 坂口安吾『桜の森の満開の下』と『夜長姫と耳男』
—美女ともう一人の女との戦い—
細井 芽生 上橋菜穂子作品論
—到達点として見る『鹿の王』—
丸田 洋渡 森博嗣〈スカイ・クロラ〉論
—「空」をめぐる構造と憧憬—
石垣瑛李花 太宰治『駆込み訴へ』論
—変容する愛とユダの挫折—

近代文学

高橋 龍夫ゼミ

- 根岸 夢子 梶井基次郎『冬の蠅』論
 須藤 美穂 井伏鱒二『黒い雨』論
 一戦後を見据える「庶民」の視点—
 土谷 映里 石川啄木『一握の砂』論
 任 凱文 大江健三郎の初期作品におけるサルトルの
 実存主義の受容と超越
 荒木まど香 遠藤周作『沈黙』に見る浄土真宗的要素

国語学古代語

加藤 浩司ゼミ

- 福田 光 古典和歌における秋の「季語」の流行につ
 いて
 石倉 綾乃 名詞「とき」「をり」の用法の変遷につ
 いて
 梅原 めい 仙台方言語彙の変遷について
 小澤 穂香 中近世の転呼音表記
 一文献ごとの特徴による—
 片山 鈴花 動詞「ことわる」を中心とした拒否、辞退を
 表わす動詞について
 林 優輝 促音表記の変遷と「っ」表記の普及
 三股 睦 「参る」の新用法の展開について
 宮下 唯 「い」の音価の歴史的変遷
 澁谷 貴恵 現代に残存する『万葉用字格』の義訓と正訓
 について

国語学近代語

中川 秀太ゼミ

- 相場由衣子 栃木県足利市における方言について
 板垣遼太郎 映画『スター・ウォーズ』シリーズにおける
 字幕と吹き替えの日本語について
 大西 梨奈 新聞における「かわいい」の使われ方につ
 いて
 斎藤 理奈 平沢進の歌詞の計量的分析
 鈴木 太一 単独でも意味を持つ外来語の接尾辞「イズ
 ム」
 田中 彩芽 新潟県新潟市方言における動詞の活用
 深沢 結加 女性声優におけるガ行鼻音の使用につ
 いて
 松本 歩夢 小学校音楽科の教科書に掲載された歌曲に
 における歌詞のアクセントと旋律の関係
 松本 実優 ゲーム『ポケットモンスター』シリーズにお
 けるわざのネーミングについて

漢文学

寺門 日出男ゼミ

- 田村 大夢 李賀の色彩語について
 石塚 詩織 魚玄機の自然詠
 岩井 瑞姫 白居易と陶淵明
 田浦 佳純 高校教材としての漢詩について
 永井きらり 『世説新語』における処世観

国語教育学

野中 潤ゼミ

- 佐藤 凌 柳田国男からみる国語教育
 田中 秀憲 情報化社会を生き抜くためのメディア・リテ
 ラシー育成について
 一言語能力育成としての国語科教育に着目
 して—
 菊池 春花 大学入学共通テストの記述試験における思
 考力・判断力・表現力の評価
 木寺 里菜 米津玄師の歌詞の表現特性
 関口 晴香 Official 髭男dismの歌詞研究
 永田 望海 山口一郎の歌詞研究
 野呂 朱里 いまの時代に求められるアクティブ・ラーニ
 ング授業とは
 一反転授業の検討—
 姫野 愛理 インストラクショナルデザインを活用した
 国語科授業の設計
 松本 旺心 通常学級における特別支援教育と国語科教
 育
 矢島 琢也 国語科における経済格差と学力差
 安永 彩実 自然体験活動における指導者のあり方
 一子どもの能力を引き出すために—
 渡邊 沙霧 エンゲージを向上させる人材育成
 渡辺 大賀 これからの文学教育について

日本文化

菊池 有希ゼミ

- 尹 建雄 新渡戸稲造『武士道』と梁啓超『中国之武士
 道』における集団主義的認識
 大塚 桃香 三島由紀夫『潮騒』における「歌鳥」の意味
 一映画『潮騒』を補助線としつつ
 小川 浩奈 変奏される「もののあはれ」
 一『源氏物語』から田辺聖子『新源氏物語』、
 そして宝塚歌劇『新源氏物語』へ—
 鹿角 葵 宮沢賢治におけるゲーテ『色彩論』受容
 金丸 奈央 泉鏡花『夜叉ヶ池』における伝承受容
 一柳田国男との関わりを視座にして—
 川畑 美緒 江戸川乱歩『D坂の殺人事件』にみられるボー
 受容
 一探偵小説における視覚的要素—
 下村明日香 小川未明とラフカディオ・ハーンにおける境
 界としての「海」
 中野 創人 武田泰淳のドストエフスキー『罪と罰』受容
 一『審判』を中心に
 舟山 綺香 芥川龍之介における「造り変える力」の展開
 一『煙草と悪魔』から『神神の微笑』、そし
 て『雛』へ
 前田 結菜 太宰治『お伽草紙』における時代背景とその
 影響
 向田菜々子 日本における『星の王子さま』受容
 山本 愛海 泉鏡花と寺山修司の『草迷宮』における「母」
 の表象
 渡邊 紗彩 太宰治『駆込み訴へ』における「信用できな
 い語り手」としてのユダ
 一聖書との比較から—

英文学科 令和2年度卒業論文題目

大平 栄子ゼミ

- 荻部 彩夏 Jane Austen の *Pride and Prejudice* の研究
 安倍 滉奈 *Pad Man* から学ぶ女性差別
 —タブー視される生理—
 伊藤 沙良 *Water* と *English Vinglish* から見る女性問題の
 時代による変化
 稲野邊あゆみ *I Am Malala* からみる女子教育の必要性
 岡野 美希 ジェンダーの観点から比較する *The Fisherman
 and His Soul* と *The Little Mermaid*
 奥脇 美羽 *Any Day Now* からみるマイノリティの社会的
 差別
 —同性愛と母性幻想の視点から—
 小澤 真実 *I Don't Know How She Does It* に見る女性と子
 育て
 小坂井育子 インドにはびこる女性差別 *The Bandit Queen
 of India* を通して
 齊藤 成美 Anita Nair, *Ladies Coupe*
 —良妻賢母像への挑戦—
 田中 賞子 *The Devil Wears Prada* から考える働く女性の
 生き方
 玉村 美紅 *The Case Against 8* から見る同性婚合法化へ
 の歩みと課題
 望月聖梨奈 *When Marnie Was There* からみる母子関係
 鎗光 愛乃 *Baby Makers* にみる代理出産の動向と課題

加藤 めぐみゼミ

- 田口 晴紀 *Peter Rabbit* からみる Beatrix Potter の生き
 る苦悩と喜び
 鶴本萌愛菜 ディズニー映画におけるプリンセス像の変遷
 —アニメーション版と実写版を比較して—
 花田 楓佳 J.R.R. トーキンが現代ファンタジーにもたら
 した影響
 渡邉千景子 『ジェイン・エア』の評価にみる女性観の変遷
 赤羽 美咲 言葉遊びを翻訳する難しさと翻訳者の創意
 工夫
 —『不思議の国のアリス』比較研究—
 天野 峰瑞 *East is East* が描くエスニック・マイノリティ
 北野 佑実 『セックス・アンド・ザ・シティ』に見る
 女性の生き方
 —日本の大学生の恋愛・結婚観と比較して—
 田口 萌華 チック・フリックにみるジェンダーのあり方
 西井 明音 *Peter and Wendy* に見る母親像
 —Barrie の人生と比較して—
 森山 陽花 *The Buried Giant* における記憶の忘却
 矢内 優穂 『ダロウェイ夫人』にみる存在意識と時間意識
 —予測困難な時代を生きるヒントとして—

竹島 達也ゼミ

- 渡邊日緒里 “The Adventures of Priscilla, Queen of the
 Desert” を通してみるドラッグクイーンの苦
 悩とマイノリティの描写
 大田 波奈 『Hamilton: An American Musical』の成功要
 因分析
 稲部 咲月 Neil Simon の喜劇について
 齋藤真那花 アメリカの家族劇から見る親と子の葛藤
 塩田 夕莉 *Pygmalion* と *My Fair Lady* からみる強く生き
 る女性と階級社会の闇
 白藤 琴美 アメリカ演劇からみる家族の理想と現実
 竹山 紗椰 *Hamilton* からみるアメリカの多様性の行き先
 中川 義尋 “Sweat” と “Cost Of Living” から見るアメリ
 カ人が求める幸せ
 長谷部 葵 *Water by the Spoonful* と *Between Riverside and
 Crazy* から見るアメリカ社会
 —アメリカ社会の闇を照らす光—
 早矢仕智乃 Comedy and Jewishness in Neil Simon
 原田 恵汰 *Angels in America* からみる認められない多様性
 三戸部彩花 現代アメリカ演劇からみる SNS 社会と人間
 関係
 —*Dear Evan Hansen* と *Next to Normal* からの
 考察—
 宮澤 響 *Sweat* と *Cost Of Living* から見る米国のトラ
 イバリズム

儀部 直樹ゼミ

- 各務 理世 20 世紀のアメリカ推理小説
 加藤 瞳子 アメリカ文学からみる死生観
 —ミッチ・アルボムの作品から—
 酒井田貴哉 ミッチ・アルボムからみる死生観
 中村 叶芽 ミッチ・アルボムの文学作品から見るアメリ
 カと日本の死生観について
 浜田 忠司 『モリー先生との火曜日』にみる死生観
 原 萌音 『もう一日』に見る、夢の中での故人との再
 会について
 半沢 優花 死生観から読み解く Kurt Vonnegut
 藤川 泰地 Mitch Albom の作品からみる死生観
 宮前 朱希 『天国の五人』にみる死生観
 横田 峻 『モリー先生との火曜日』から考える、死生
 観と生きがい

鷺 直仁ゼミ

- 今井 咲花 西洋絵画に於ける音楽とその意義
 鶴飼 大輔 日米比較文化を通して考えた野球とベース
 ボールの違い
 岸 菜々香 Museum Decolonisation: Ethnocentricity and
 Representation of Japan at the Victoria and
 Albert Museum
 相楽 美結 ポスト印象派の美術史への影響 ゴッホの
 アメリカ、イギリス、日本における受容を通
 しての考察

渋谷 公乙	外見と評価の関係性
杉浦 緑	ジャン＝リュック・ゴダール作品に見るヌーヴェル・ヴァーグ期の映画表現
鈴木 沙希	自然と共に生きた作家ビアトリクス・ポターが表現した人間と自然が共生する理想の世界—『ピーターラビットのおはなし』を通して—
松田 成龍	Cultural Comparisons in "Race"
武川愛里沙	日本とアメリカの比較 ～年末年始から見る～
湯川 真佳	19世紀における日本美術と西洋美術の関連性について
星野 天哉	日英の労働環境におけるジェンダーギャップについて

中地 幸ゼミ

平野 豊和	ラングストン・ヒューズにおける黒人世界の研究
雨宮 日菜	<i>Sula</i> から読み解く少女の成長と黒人コミュニティの関係
井上 愛理	<i>To Kill a Mockingbird</i> と <i>Go Set a Watchman</i> に見る差別
江藤 大地	<i>The Color Purple</i> における女性差別
大澤 拓己	<i>When the Emperor Was Divine</i> における日系アメリカ人の苦悩と葛藤
刈田耕太郎	<i>Twelve Years a Slave</i> 論
小林 みか	映画『WATER』から考察する1930年代インドにおける寡婦の社会的地位や苦悩
汐見奈々花	<i>Passing</i> における人種と成功
名久井優希	ジョン・オカダの <i>No-No Boy</i> から見る日系アメリカ人1世と2世のアイデンティティの違い
野澤 萌佳	『サルガッソーの広い海』における狂気
野村 優花	Jhumpa Lahiri の短編作品から見る移民
福田 絢美	オスカー・ワイルド『サロメ』論
福田 翔	黒人音楽と黒人差別の歴史

HYWEL EVANS ゼミ

井上 凱	The precise way in which persons with autism fail to communicate
CALDITO MATHEW	Communication: Human beings & artificial intelligence
押方日向子	Comparison of Japan and Australia from the point of view of beach culture
下重なぎさ	Effective English teaching methods against negative language transfer
宗石 大河	How to connect morphology to leaning English
飯嶋 優馨	My theory of personality and culture
石山 育樹	Attitude and bilingualism
上原 功裕	The decline and future of opera

翁長真緒綸	The effect of words on personality
金子 葉月	Shared assumptions and values in Japanese hospitality
木村 夏菜	Whether high and low context culture exist or not.
齊藤 結里	How can Japanese students learn articles
津坂 葉月	Problems and prejudice faced by Japanese returnee students
鶴田あお葉	A cultural analysis of customer satisfaction in real estate sales
中島 千晶	Comparison of English and Japanese works for children.
松廣 涼夏	The relationship between second language acquisition and language distance
伊良波 ステファニー 瑞紃	How to fight against racism

福島 佐江子ゼミ

伊藤 綾香	配慮言語行動に関する一考察 —何が配慮となるのか?—
宇留野友篤	ポライトネス理論に関する一考察
下川原侑里	ポライトネス理論の観点から見る言語使用の普遍性
流石 葵	ポライトネス理論から見るほめに関する一考察
田中 葵	英語教育における語用論の必要性
前川 里穂	依頼表現に関する一考察 —ポライトネスとジェンダーの観点から—
毛利 彩咲	謝罪表現の日米比較 —ポライトネスの観点から—
渡邊明花音	「断り」に関する一考察
渡辺 佳穂	—ラポールマネジメントの観点から— SNS コミュニケーションに関する語用論的解釈

OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri ゼミ

伊藤 みる	Synchronic and Diachronic Studies of English Language
江崎 花香	- ENGLISH LANGUAGE TEACHING IN JAPAN - A STUDY OF EFFECTIVE METHODS FOR IMPROVING ENGLISH PROFICIENCY IN JAPAN
桶川 拓朗	Bilingualism and Personality Changes- A Case Study of Japanese EFL students-
黒星 太雅	Foreign Language Teaching and Learning: A Study of the Effective Teaching Methods of Japanese Language
小林 勝汰	Linguistic Gender Differentiation in English and Japanese Language
榊 拓也	- Translation and the Space between - Issues of Translation between ENGLISH and Japanese Languages

- 進藤 樹 Gender Differences in Communication
富澤 里奈 - Intercultural Communication- A Study Of Nonverbal Information In Intercultural Communication
- 吉田 大聖 Bilingualism and Biliteracy in California, the United States: Applicable Approaches to Bilingual Education in Japan

三浦 幸子ゼミ

- 片岡 玖実 Communicative Language Teaching in Elementary English Classroom: Focusing on TPR
- 櫻井 穂乃 Determinants of Happiness: Analyzing the Traits of Human Happiness
- 十倉 直暉 Sniffing out Truffles? ~ The Study on Recasts and Learners' Interlanguage Development in EFL Classroom ~
- 大谷 亘 Considering the New Course of Study and Reforms of University Entrance Exams
- 島袋 風子 Analyzing Topics in EFL Textbooks: Focusing on Issues of Okinawa
- 高 竜太 Affective Factors and Motivation in English Classroom in Japan
- 塚本 瑛美 Teachers' Intervention in Collaborative Writing Activities in Junior High School English Classroom
- 堤 彩香 Applying CLIL to Junior High School EFL Instruction
- 中村 智大 Considering Effects of Rapid Reading in Learning English as a Foreign Language
- 原 茉梨花 Roles of Input in First Language Acquisition
- 三浦 友香 A Study of University Students' Perceptions and Comprehension of English Loanwords in Japanese
- 元村 侑紀 The Significance of Repetition and Spacing in Vocabulary Learning
- 渡辺 陸 Considering Politeness in Workplace
- 鮎澤ひかる Effects of Shadowing on Developing Listening Skills

Hamish Gillies ゼミ

- 串山 裕子 Stuttering and Language Identity: Investigating the Influence of L2 identity on Non-transference of stuttering from L1 to L2 Speaking
- 佐々木翔太 Merits for Japanese to Study English in an ESL School in the Philippines: A Comparison with Studying English in a Western Country -
- 林 賢之介 The Effect of Studying Abroad: What Influences Learners' Personalities.
- 池田綺実香 A Cross-Cultural Analysis of Junior-High English Textbooks
- 梶田 哲平 Exploratory Research of Language Learning Motivation: Focusing on Positive and Negative Experiences
- 佐藤 葵 Effective English Education Method Using ICT in Public Elementary Schools
- 田島 拓弥 Japanese Junior High Students' Demotivation: Considering Various Gaps
- 米本 佳澄 Japanese Anime English learning: A Quantitative Study of Learning English with Translated Japanese Animated Films
- 渡邊 智子 Attitudes towards and Awareness of L2 Dialects: The Case of Foreign Students Learning Japanese as a Foreign Language
- 櫻井 知也 How does Self-Confidence Affect Language Learning?

日吉 信貴ゼミ

- 相川 花音 Mary Poppins から見る実写版が原作に加筆する必要性
- 尾関 悠佑 ディズニー実写化映画分析の意義 —なぜ Dumbo は空を飛ぶのか—
- 鍛冶谷千晶 『ハツカネズミと人間』に見られる人間関係に関する考察
- 疋田 秀哉 矛盾と構造 —翻訳研究の深みを覗く—
- 丸小山玲央 Quentin Tarantino 監督作品における「老い」の表現

社会学科 令和2年度卒業論文題目

現代社会専攻

現代史 菊池 信輝ゼミ

- 上野 光輝 ドイツとフランスの戦後友好関係の変化
大熊 彩乃 戦後歴史学における「司馬史観」
—冷戦期を生きた司馬遼太郎—
岡里 奈美 近代図書館の歴史とこれからの図書館の在り方について
—近代図書館の成り立ち、公共図書館の裁判事例からこれからの図書館について考える—
嘉納 英佑 戦後沖縄地域における経済計画と返還跡地開発
—内発的地域振興を目指して—
高坂 凌 長野県から見る満州移民
小林 陸人 社会運動とSNS
小堀 隼弥 象徴天皇制の意義と役割
—行幸の視点から—
笹之池優璃 日本におけるアイドルの変容について
田中 渉 靖国問題による影響と新国立追悼施設を設置する案について
手嶋 優介 歴史認識問題と歴史教育の関係性
—日・中・韓歴史認識問題は解決するのか—
寺本 詠和 日中戦争下における日本人の反戦活動
小宮山菜々花 明治六年政変とその影響

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

- 千野 聖広 在日米軍基地が沖縄に集中した原因
—沖縄戦およびアメリカ合衆国による沖縄統治を通して—
宇高公陽郎 「情報」科目学習指導要領と教科書の検討を基にした日本におけるメディア・リテラシー教育の問題点と改善案
長田 莉奈 学校教育と社会教育の連携についての考察
—ヨーロッパ近現代の思想から—
郭 衛威 政治と道徳における「永遠平和のために」への考察
工藤 有咲 ベネター「生まれてこないほうが良かった」—存在してしまうことの害悪—からみる反出生主義の主張—
五明 仁 「大衆社会」に潜む危険性について
佐藤 成美 “沈黙を破る”ことがより身近になるには
千葉 公平 私的所有は自らの身体にも適用されるか（自然権論的リパタリアンの自己所有権への批判を通して）
船田 日菜 「自由論」とダイバーシティ
—LGBT 容認の正当性とその在り方—
渡邊 拓真 社会正義実現を目指す上で家族はどのように捉えられるべきか

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

- 額綱みのり コミュニティFMを通じたまちづくりの現状と課題
内田 蒼 大学生の学習意欲の要因
及川 春道 日本の相対的貧困家庭における子どもの文化的貧困リスク
—なぜ生活保護には、子どもの習い事に関する規定がなされなかったのか—
里内 博一 漫画の持つ価値
佐野 聖哉 大学生の運動習慣とスマートフォン（携帯電話）およびゲームの関連
末吉 将孝 学歴社会批判論の文法
鈴木 悠斗 公共図書館の政策展開における居場所の位置づけ
西浦 大輝 地方におけるキャリアの在りよう
—地方銀行員の仕事と生活を手掛かりとして—
原 菜々花 学校と学校外の支援の在り方
藤岡寿々加 「多様な性」の認識および受容における地方と都市部の違い
藤原 菜摘 道徳教育の意義の再考
古田 柚香 不登校経験生徒の受け皿としての定時制高校再考
森 朝美 定番はどのように生まれるのか
尹 星根 日本語教育におけるネイティブ教師とノンネイティブ教師に対する学習者の意識

企業経営・労働とジェンダー 野畑 真理子ゼミ

- 五十嵐 茜 日本における性産業
—性風俗の現状と諸問題—
井上 隼太 日本の雇用と過労死
小野田純也 セクシュアルマイノリティに関する教育現場の現状と課題
熊谷 果歩 女性とケアワーク
品川 望 子どもの貧困の連鎖が起こる諸要因と課題
田高 亮広 若者のワーキングプア
—その現状と支援—
築本 優花 外国にルーツを持つ子どもの日本における教育問題
奈良垣寿晃 ジェンダーと教育
堀内 彩香 仕事と育児の両立について
山本健太郎 外国人労働者の現状と課題
米倉 幸太 ワーク・ライフ・バランスの実現と管理職のマネジメント
渡部 紘史 キャリア教育から見る日本の就活

現代政治論 進藤 兵ゼミ

- 河野 颯馬 愛知県尾張地方の観光の発展の可能性について
- 井上菜々子 女性が第一子出産後も働き続けられる社会の構想
- 窪田 雄人 スポーツと都市の関係性からみるまちづくり
—ドイツと都留市の比較分析から将来の地域コミュニティの発展を考える—
- 阪倉 僚 免許返納問題と高齢者の生活支援
—交通権の視点から考える—
- 佐野 敦希 地域スポーツ体制の現状と課題
—ジュニアスポーツ環境向上の観点から—
- 成島 拓哉 日本の「格差」縮小に向けた教育改革の検討
- 干場 舜太 富山県における循環型社会づくり
—SDG s の重要性—
- 安富 遥 不登校児童支援におけるフリースクールの利点と課題
—フリースクール「オンリーワン」を事例として—
- 吉岡 未祐 若い世代の投票率低下の諸原因とその改善策
- 林 建偉 日本の外国人労働者政策を再検討する
—日本の技能実習制度の沿革を焦点に—
- 藤田 宙大 高速道路の存在意義とは何か
—歴史と現状と地域経済から探る—

公共政策論 高橋 洋ゼミ

- 四ッ谷 馨 地方自治体の公共交通政策におけるコミュニティバス事業
—人口指標に基づく分類と事例研究による検討—
- 荒岡瑛一郎 文化財政策における保護行政から「稼ぐ文化財」への転換
—官邸主導による政策転換の影響検証と過程整理—
- 梶浦 杜馬 日系外国人労働者と技能実習生に対する住民施策と多文化共生
—先進自治体による取組の比較分析—
- 見目 柚香 ソーシャルメディアの政治における役割
—政治家の情報発信手段と市民の意見表明手段—
- 小池 丈流 日本における洋上風力発電の導入に関して
—再エネ海域利用法に着目して—
- 小林 晴佳 日本の高齢者福祉政策における矛盾の帰結
—地域包括ケアシステム・日本版 CCRC 構想の視点から—
- 斉藤 樹 外国人介護人材受け入れにおける地方自治体と国の関係
—国の政策方針と地方自治体の取り組みに着目して—
- 丹治 群 地方赤字鉄道路線の維持に向けた政策分析
—旧国鉄「特定地方交通線」転換路線での「民間アイディアの活用」事例から—

- 沼澤 拓斗 日本農業政策における価格・所得政策の変遷分析
—二度の政権交代に基づく直接支払の変化に着目して—
- 薬袋 曜平 地方公共団体の文化財保護政策における政策主体の多様化
—地域文化の保存・活用に関する市民参加プロセスの分析—
- 宗形 星虎 第二次安倍内閣における菅内閣官房長官の政策形成による役割
—携帯電話料金値下げ改革に着目して—

環境法 小島 恵・赤淵 芳宏ゼミ

- 青柳 恭介 地域における再生可能エネルギーの可能性
—太陽光発電の視点からの一考察—
- 赤岡 舞桃 日本における LRT 導入の課題と展望
—諸外国を例に—
- 赤澤 拓海 景観保全の実現に向けた課題
—無電柱化に着目して—
- 阿部麻理恵 中小企業における環境経営の普及促進に向けて
- 久保田大晟 低炭素社会の実現とコンパクトシティ
- 黒木 慎吾 CCS 事業推進へ向けた取り組みと普及に向けた課題
- 重松 侑希 海洋プラスチックごみ問題において日本がアジアを主導するための取り組み
- 鶴岡 美沙 日本における食品ロスの実態と今後の課題
- 早瀬 和宏 日本のスマートシティ構想における電気自動車の位置づけ
—先進事例からの示唆—
- 藤田 直哉 社会的受容性から見るこれからの太陽光発電
- 森谷 泰成 遺伝子技術を用いた食品の可能性について
—表示規制の側面から—
- 矢崎 良真 太陽光発電の山梨県での普及に向けて
- 山田 博也 リニア中央新幹線と環境影響評価制度
- 吉留 祐伍 プラスチックごみ問題とレジ袋有料化

憲法 樋口 雄人ゼミ

- 芦沢 尚哉 日本における外国籍児童・生徒の不就学問題の現状と課題
- 笈田 春奈 日本における離婚後共同親権制度導入に向けた取り組みの現状と課題
- 小原 双葉 過労死・過労自殺の起こる労働環境
- 加藤 陽成 国連平和維持活動の発展と憲法解釈の変遷
- 河野 未奈 日本における若年層の相対的貧困と社会保障政策
—貧困と格差のない社会の実現に向けて—
- 込江 梓 児童虐待と親権規定について
- 佐々江隆大 政治的主張を伴う表現活動に関する諸問題
- 鈴木 友也 ドイツにおける憲法保障制度と「憲法の敵」
- 伴野 夏芽 死刑存置国である日本の現状と課題
- 前川 未来 新しい家族の在り方としての同性婚
—すべての人が個人として尊重される家族制度を考える—

日本経済論 福田 泰雄ゼミ

青木 克憲	高水準の幸福度における条件の考察
天野 颯太	地方都市における中心市街地活性化政策の展望
岩崎 希来	子供の貧困を考える
王 夢秋	人口変動から見る経済発展
荻野瑛里奈	日本の貧困
佐藤 匠	『食』と『農』の取り巻く現状と未来
武智 大和	ソーシャルゲームに対する課金行動の原因とその影響について

鴫崎 志歩	子供の貧困と貧困の連鎖
林 隼也	非正規雇用増加の背景と格差問題
茂木 舜一	海外の福祉から考える日本の高齢者施策の課題
若松 響希	地域経済の現状、課題 一岩手県北上市の工業団地から地域経済を考える一
渡邊 舜也	山形県の現状から地域活性化を考える

環境・コミュニティ創造専攻

環境社会学 神長 唯ゼミ

飯野 寛大	エコツーリズムが地域住民にもたらす認識の変容 一南アルプス市芦安地区とユネスコエコパーク一
石黒 克弥	富山県のレジ袋無償配布中止にみる有料化への課題
稲穂 翔	Jリーグクラブにおけるごみ減量 一スタジアムでの取り組みに注目して一
十枝内康哉	核燃料サイクル施設が与える六ヶ所村への諸影響
宮崎 徹	食品ロス削減推進法成立に伴う我が国のフードバンクの在り方
山崎 雄大	鹿児島島のシンボル「桜島」と地域住民の歩み

鈴木 康平	岐阜県多治見市における美濃焼を中心とした観光事業の展望
出口 育実	宇都宮市におけるシェアサイクル 一他都市のシェアサイクルシステムと比較して一
東出亮太郎	学校におけるいじめ問題とその対応 一大津市中二いじめ事件を事例に一
三浦 萌子	地藏盆の歴史と現状から見る地域社会の変容 一京都市上京区と左京区における事例から一
村上 佳穂	森のようちえんにおける SDGs 活用の可能性
吉田 真菜	祭礼の継承と地域コミュニティのつながり 一祖父江の虫送りを事例に一
義見 祐野	観光地清里の衰退の原因と課題

環境教育学 高田 研ゼミ

井上 茜	消費税増税に伴う幼保無償化の現状
中里 伶	不登校児の内的世界についての考察 一当事者の語りの分析から一
秋元 麻衣	自らの仕事に自然体験がどのように影響しているのか 一自然教育に関わる人々への聞き取り調査から一
太田 祥弘	山梨県におけるイノシシと人間の問題 一獣害被害からの考察一
貝尾 夏芽	ESD アプローチによる批判的放射線教育に関する考察 一福島県ではどのような放射線教育が行われるべきか一
川本 龍馬	日本の防災教育手法の分析と防災教育の展望 一新型感染症流行社会における防災教育のありかた一
清水日南子	山梨県韮崎市における水害の歴史と今日に遺る災害の痕跡

地域環境計画論 渡辺 豊博ゼミ

池野 綾音	6次産業化による農業振興の可能性 一静岡県長泉町を事例に一
石黒 楓季	商店街の活性化について 一富山県高岡市御旅屋通り商店街を例に一
大野 裕貴	中心市街地の現状と今後について 一静岡県掛川市を事例に一
川上 晴輝	温泉地の活性化を考える 一山口県山口市湯田温泉事例に一
佐藤 晴生	地酒による地域活性化の現状と課題 一岩手県一関市を事例として一
滝田 乃亜	南海トラフ地震に伴う防災の現状と課題 一静岡県焼津市を事例に一
西村 拓巳	観光まちづくりによる地域活性化の提言 一西裏地区を活用した山梨県富士吉田市の地域活性化について一
長谷川 舞	五島（福江島）の島おこし 現状と課題 一観光業を活かした地域活性化一
平尾義之介	静岡県内におけるお茶産業の現状と今後の展望 一本山茶産地を例に一

森 愛理 都留市の地域おこしについての考察
渡邊 和恵 歴史・文化・水を活かした街づくりの方向性
—都留市を事例として—

地域経済論 両角 政彦ゼミ

宇佐美温加 地域産業資源を活用した農工商連携の実態と展望
—静岡県静岡市を事例として—
加納 愛子 中山間地域と都市的地域における移動販売事業の比較考察
—長野市とその周辺を事例に—
高 堯 中国の廃プラスチック輸入規制後の日中リサイクル現状分析
—中小企業を中心に—
嶋本 貴瑛 農産物ブランド化研究の成果と課題
—認証制度と環境保全型農業による高付加価値化に注目して—
杉山 太雅 地方銀行における FinTech 活用による地域経済の活性化
—筑波銀行を事例に—
橋本 夏林 地産地消の持続可能性と産業間連携
—岐阜県恵那市の取り組みを事例に—
藤井 美帆 電子地域通貨による地域コミュニティ形成と新たな可能性
—さるばるコインを事例に—
松岡 和 川場村と世田谷区の都市農村交流がもたらす地域的役割
水野 弘大 ホームタウン活動がJリーグクラブにもたらす効果と課題
—松本山雅 FC を事例に—
良知 香帆 果樹生産における化学肥料使用による環境負荷
—山梨県笛吹市を事例に—
尾家 一輝 環境ビジネスにおける今後の展望と課題
—北九州エコタウン事業を事例に—

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

相澤 美月 要支援・要介護期の高齢者の生活について
高齢者本人と家族等の対応の事例研究
天野 未悠 高齢社会における高齢者へのよりよい介護とは
—サ高住を中心に—
戌亥 サイヤドアズアーン
CIAMの歴史的経緯
—CIAM5に関する翻訳を中心に—
邱 程程 中国における世界文化遺産の保護研究
—福建土楼を事例として—
佐々木彩音 江戸時代後期における火災急増の要因と江戸の火災特性

佐藤 俊基 農山村の森林における境界線不明化問題
—山梨県道志村での実地調査—
清水 詩衿 甲府市中心街における駐車場のあり方に関する研究
園田 真子 広幅員道路に面する集合住宅の立面についての研究
丁 雨晨 歴史市街地の保護と再生
—中国蘇州市旧市街地を例として—
松田 啓佑 立地適正化計画における災害リスクの研究
村松 皓史 新型コロナウィルス流行下における表象文化の変化
—With コロナに求められる新しいイベント像—

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

岡崎 貴喜 森林における土地の所有者不明問題
千葉 菜緒 地域の有形文化財と民俗文化財の活用と保全
—岩手県一関市千厩町の事例から—
米村かれん 移動スーパーの継続可能性とその要因

地域社会論 田中 夏子ゼミ

宮崎 俊光 地域組織を通じた地域行事への参加による世代間コミュニケーションの深まり
卯月 真結 市民が手話サークルに学ぶことの意義とその学びが地域社会にもたらす効果とは
—手話サークル千羽会の参与観察およびアンケート調査を通じて—
小澤 集 高齢期の暮らしを豊かにするための日本版 CCRC の可能性と課題
川山 大輔 地域資源を活用した活性化活動の現状とそれに対して住民の認知が与える影響について
坂本 良哉 「性の多様性」教育実践の可能性と課題
—「対話」を重視している「性の多様性」教育の担い手への聞き取り調査より—
瀧川 莉子 エンターテインメント空間における非日常の変容についての考察
薬袋 実紀 農業における事業承継の現状と課題
—山梨県における農業承継の困難とその対応策を中心に—
宮崎 大智 近隣型・地域型の商店街の、消費の場をこえた新たな役割の可能性
—長野県辰野町下辰野商店街を事例に—
山上 輝晃 地方都市での大学を核とした地域との連携による地域づくりへの期待と課題

比較文化学科 令和2年度卒業論文題目

伊香 俊哉ゼミ

- 松尾 詩音 日本の「標準語」と沖縄
馬場ひかり 日系二世兵士、人種差別との戦い
—それはアメリカ社会に何をもたらしたのか—
石山 晴菜 米軍兵士のベトナム戦争体験
—「加害」と「被害」の二面性—
入澤 星矢 日本軍における人体実験・生体解剖をめぐる
関係者の心理的傾向の違い
大石 敬子 従軍日記から見る日本兵と戦場
—村田和志郎『日中戦争日記』を中心に
死への待合室
—ワルシャワ・ゲットーでのユダヤ人の生活状況
大東 陽祐 冷戦後の地域紛争処理のあり方をめぐって
—ユーゴスラビアとルワンダの事例から
上川 諄介 戦時下における軍隊・軍人と性
—日本・ドイツ・アメリカの比較を中心に
河野 憂貴 アメリカ兵の戦争神経症の比較的考察
—ベトナム戦争、イラク戦争、沖縄戦の戦争
体験から
佐々木修太郎 科学者と軍事研究
—アメリカと日本の事例から
佐藤 駿太 第二次世界大戦期における強制労働と戦後
補償の日独比較
永島 瑞希 太平洋戦争下日本の食糧難と食生活
三俣 佑貴 日本の大陸政策
—日清戦争から対華二十一条要求まで

内山 史子ゼミ

- 山口 優太 ムラユ語の近代
—マレーシアとインドネシアを中心に—
北谷 京花 外国人労働者の就労実態からみる
日本の移民受け入れの展望
岡田 脩作 帝国主義の変容
—第二次世界大戦以降の帝国主義の特徴に
ついて—
加藤 桃子 ベトナムにおける韓流の興隆
—ドラマ・大衆音楽を中心に—
川邊 麗媛 東南アジア諸国のeスポーツマーケティング
—7か国のeスポーツ事情分析—
志村 彩 カンボジアにおけるアンコール遺跡観の変化
—フランスの介入を契機に—
下條果奈美 ボルボト政権崩壊後の教育復興と教育開発
援助の意義
—カンボジアにおける科学教育—
戸塚 裕斗 インドネシアにおける主要貿易輸出品目の変化
—1870年から1930年における糖栽培と
ゴム栽培の変化の共通点と相違点—
廣地 風穂 マレーシアの婚姻制度について
福田 朱音 東南アジアにおける美術様式の変遷
吉田 彩乃 再創造されるバリの文化と文化政策
若林 直樹 シンガポールの外国人家事労働者の影響
—受け入れ国、送り出し国の双方に着目して—

大辻 千恵子ゼミ

- 安田 四季 結婚制度
—夫婦別姓から考える—
田上穂志乃 殺処分の国から動物愛護の国へ
—ドイツの政策を手がかりに—
雨宮 大晃 黒人初のメジャーリーガー、ジャッキー・ロ
ビンソン
—アメリカスポーツ界の黒人差別との闘い—
有泉 那奈 女性が就労の継続をできない理由
—保育サービスから探る課題—
石垣 淳也 難民受け入れと排除
—ドイツ社会の難民対策のゆくえ—
下川原美優 「労働」としてのセックスワーク
—日本における現状からの一考察—
下村 拓也 在日コリアンの差別と課題
—ヘイトスピーチから考える—
千葉 拓人 技能実習制度にみる労働政策と求められる
「国際化」
—人口減少社会やグローバル化をむかえて—
花島 百香 施設養護・家庭の養護双方の利点を活かした
社会的養護の拡充を目指して
—イギリスの取り組みを参考にして—
松尾 菜加 優生保護法による命の選別
—奪われた障害者の尊厳と自己決定権—
安田よもぎ 発達障がいと知的障がい、その多様な発達
—自然体験活動からみえてくるもの—
佐藤 広大 女性選手をとりまく野球環境
—だれもが楽しめる機会の平等にむけて—
西門 拓真 日本におけるヒップホップ・ミュージックの
可能性を探る
—日本語ラップは何故売れないのか—

岸 清香ゼミ

- 石澤 瑞穂 周縁から見つめ直す現代教育
—山村留学運動から導かれる子どもの自己
表現—
安藤 了亮 カワイイという革命
—「6%DOKIDOKI」が表現するファッション
の可能性—
興石 桜 湯治の再興を問う
—由布院が提唱する予防医学としての温泉
需要と温泉地活性化—
鈴木 朋美 空き家は何も悪くない
—富士吉田「アキナイ」プロジェクトによる
活かす暮らしの持続化の試み—
鈴木 百香 雑貨化の中の眼鏡づくり
—増永眼鏡による「伝統」の創出と上質の装い
「遊び」から「学び」へ？
—図書館のボードゲーム活動がつなげる共
有型コミュニケーション—
畠山 侑咲 駅弁売りの新展開
—「かにめし本舗かなや」に見る駅ソトからの
懐かしさの演出—

- 瀧上 葵 「教育普及」が導く美術館における学び
 —金沢 21 世紀美術館「ミュージアム・クルーズ」が創出する能動的美術体験
 山内 咲乃 観光資源としての映画『舞妓はレディ』
 —歌とダンスがもたらす誤解と親近感

齊藤 みどりゼミ

- 高見まりあ 海賊史観から考える現代における表象の変化
 岩切恵利奈 男性の化粧史
 —男性の化粧敬遠の原因とその改善—
 上野 華純 Representation of Esmeralda through a Comparison
 of Hugo's Original and Disney Film Adaptation
 加藤 音萌 「女子力」の呪縛
 —雑誌の比較分析から—
 北島 智也 正義の象徴としてのホームズ
 —『シャーロック・ホームズ』作品における
 悪の意味—
 小林 紗奈 『不思議の国のアリス』における日本語訳の
 比較について
 坂田 裕海 文学者としてのキップリング と『ジャングル・
 ブック』の児童文学的価値についての考察
 塩本 将也 クルド人の難民問題について
 寺岡 美咲 ディズニープリンセス作品と悪役
 中西 杏奈 日本語教育における媒介語の使用について
 福本 夢佳 『くまのバディントン』からみる移民受け入
 れと共生社会への希望
 宮川こころ トニ・モリソンの『青い目が欲しい』にみる
 価値観の差異
 山下 夏穂 Existentialism in *The Unbearable Lightness of*
Being by Milan Kundera
 吉田あいか コメディにおける人種差別表現
 和田 拓也 桃太郎の知名度に関する分析と考察

佐藤 裕ゼミ

- 山田 悠策 開発支援の「受け手」から消費者へ
 —貧困削減における BOP ビジネスの可能性
 窪木 瑞穂 大都市高齢者のコミュニティ再生における福
 祉 NPO の役割
 —東京都北区の事例
 清水 綾子 日本の移住家事労働者導入とその課題
 —家事労働者条約とグローバルな連帯の
 はざま
 中山 綾太 カナダの移民政策とポイント制度
 —〈多文化主義と選別〉をめぐる葛藤
 池田 奈留 プミプトラ政策下のマレーシアにおける
 マレー系女性の労働
 —民族とジェンダーの複合差別に着目して
 草野日向子 インド農業の矛盾と内発的発展の模索
 —ヴァンダナ・シヴァによるエコフェミニズム
 の思想と実践をてがかりに
 佐藤香菜帆 東日本大震災による避難と再定住先での
 コミュニティ形成
 —福島県富岡町の事例から

- 武 一帆 電源開発による地域社会の変容
 —山梨県東部における水利施設と産官民の
 関係
 北條 七彩 ケニアの若年失業問題とインフォーマル・セ
 クター就業
 —生存維持をめぐる〈構造と主体〉に関する
 予備的考察
 松田 実希 中国の卓球はなぜ強いのか
 —選手育成にみる国家とナショナリズム
 水谷 まい 中国農村の出稼ぎと留守児童問題
 —教育格差・疎外・家族関係に着目して
 皆川 久哉 ブラジルにおける不均等発展とインディオの周
 縁化
 —従属理論をてがかりに
 余 榮 中国における農村女性の出稼ぎ労働とジェ
 ンダー
 —非識字者層女性の生計戦略に着目して
 梶澤 碧 日本におけるネパール人留学生の移民過程
 —2010 年代に着目して

志村 三代子ゼミ

- 有賀 利気 『昨日と明日の間』の手からみる川島雄三の
 テーマ
 石崎愛依奈 曖昧さからみる小津の真意
 大島安理沙 『輪るピングドラム』における家族のかたち
 近藤 未来 『戦場のメリークリスマス』における「剣」
 の表象
 佐藤 七海 『バイオハザード』
 —新時代のゾンビ映画—
 武市みなみ ディズニージェンダー観の変容と現代にお
 ける役割の考察
 —ディズニーコード 4・0 を探る—
 放生 優斗 小津映画における時間的・空間的な反復
 三浦 加帆 宮崎映画における共生の試み
 —『風の谷のナウシカ』から『もののけ姫』
 へ—
 横田 菜月 『リリイ・シュシュのすべて』から見る岩井
 俊二の色と光
 鷲谷菜々子 今敏 視覚的表現と虚構
 渡邊 晋也 『仁義なき戦い』『バトル・ロワイアル』で描
 かれる閉塞と時代に仮託された若者たち

野村 佳世ゼミ

- 吉岡 未希 地域言語・少数言語の教育と保存について
 —フランスのバスク語と日本のアイヌ語の
 比較—
 伊藤 和奏 アメリカの教育と地域交流から考察する
 多文化共生社会実現への可能性
 碓井 亜美 現代日本人に求められる愛国心
 —明治以降の愛国心教育に着目して
 梶原 真優 国際児のアイデンティティと日本の学校文化
 黒田 桃 フランスにおけるイスラムのスクーフ
 —排除の正当化と差別
 源田 桐葉 外国にルーツをもつ児童生徒に対する
 日本語教育
 —オーストラリアの事例を参考に

近藤 紗良 日本の移民政策
—多文化共生に向けて

佐藤わかな スカーフ論争から考える多文化共生
對馬 美有 スペインの共生社会の構築
—カタルーニャとバスクを中心に

武士沢琴音 アメリカの多文化教育
—サラダボウルからジャズへ

本間 優弥 ドイツにおける排外主義の広まり
—「ドイツのための選択肢」を参考に

牧野なつ海 移民の若者と警察
—郊外の暴動に込められた人種差別への
メッセージ

丸山 理恵 新たなアメリカ多文化社会構想
—現在抱える課題を踏まえて

宮川 直貴 コソボ紛争から見る民族問題

邊 英浩ゼミ

高橋砂里奈 従軍慰安婦
—現状分析と真の解決のための提案

池田 昂平 日本による朝鮮植民地支配の現在的再照明
姜 雪純 移動するアイデンティティー
—行動・言語・意識の次元を超えて

金城 夢乃 琉球史における渡来人
齋藤 晏理 自己肯定感に関する国際比較研究
生井澤 杏 韓国における美の研究
—日韓比較でみる外見重視社会と今後の展望

柳澤 実聖 外国文化の受容と規制
山本 優花 日韓の戦後補償問題
—補償問題における日本政府の戦略とその
対抗措置の考察

分田 順子ゼミ

石井 茉梨 ドイツにおける「過去の克服」
—映画「帰ってきたヒトラー」によるタブー
への挑戦

庵 彩花 フランスにおける「移民の記憶」
—「記憶の承認の場」としての国立移民史博
物館の考察

植松 珠奈 校歌にみる「理想の日本人像」の変遷
—尾崎喜八時代の校歌（昭和中期）と富士見
中学校校歌（平成23年制定）の比較から

遠藤 紗織 農業における新たな生産者と消費者の関係
を求めて
—地域支援型農業への挑戦

大森あゆみ 過剰消費社会から持続可能な循環型社会へ
—環境共生都市の取り組みを中心に

川崎 晴香 日本の学生服の歴史とジェンダー
—ジェンダーレス制服の問題点

榊原由布子 多文化社会における地域日本語教室の在り方
—「居場所」機能と「多文化社会型居場所感
尺度」に着目して

佐倉 陽子 高齢者の食を考える
—孤食・共食による影響に着目して

田摩はるか 「性の多様性」を目指すアライの現状と課題
—「支援する／支援される」関係を問い直す
ための考察

千葉みのり 衣服の大量廃棄問題の解決を目指して
—ふくのわプロジェクトのリユースの取り
組みを中心に

安田 光 福井県の外国人雇用について
—ベトナム人技能実習生の受け入れを中心に

竹井 春香 日本のアートシーンにおける表現の自由
—あいちトリエンナーレ「表現の不自由展・
その後」中止事件を中心に

水野 光朗ゼミ

勝又 太郎 クジラについて
城代 雪乃 日米のアミューズメントパークについて
鈴木 琢矢 日本における葬儀
細野真千果 日本女子サッカーについて

山本 芳美ゼミ

戸塚 寛子 “日本的”とは何か
—ジャポニスム期の欧米社会に受容された
キモノの分析より

天野 楓子 樋口一葉を取り巻く明治の女性たち
小澤 紘人 アニマルスポーツの人類学
—鳩レース愛好家のインタビューを通して

甘 俊波 化粧の歴史から見る日中の美意識の違い
菅野 真由 新聞記事・広告から見るアジア買春ツアーに
よって構築された日本人男性イメージ

佐々木遥香 戦後日本における女性の技術習得
—婦徳としての針仕事、自立手段としての
洋裁—

當山 りせ 現代社会で求められる子供らしさとは
何か？
—化粧の低年齢化に関する議論から考える

能口 芹花 野生動物駆除に見る日本人の動物観
—増えすぎたシカと地方農山村のあり方

舟山 玲奈 マタギ文化の変遷と現在の課題
—山形県小国町小玉川の事例を中心に

和光 幸美 おしろいと鉛毒規制
—なぜ毒性を知りながらも使い続けたのか

伊藤 千聡 「教育ママ」の変遷
—1970年代から現代まで

国際教育学科 令和2年度卒業論文題目

青山 郁子ゼミ

- 新井小夜子 内発的動機付けは子供達にどう影響するのか
 荘司 海帆 大学生の就職活動におけるリクルートスーツの役割
 —リクルートスーツの変化とコロナ禍による影響—
 白戸 裕子 HSCの文化間での適応感・感情表出の比較
 —個人主義社会と集団主義社会の文化的差異がもたらす不適応リスクへの影響と感情表出の特徴—
 菅原 早苗 大学生の抑うつ予防
 —行動活性化療法を用いて—
 中嶋 詩葉 Associations between high screen time and the risk of mental health problems among Japanese college students

木下 慎ゼミ

- 大田原美和 学校における対話は、なぜ重要なのか
 —p 4 c に着目して—
 岡田 有沙 国際バカロレア教員と一条校の教員に求められる資質・能力の違い
 —ディプロマプログラムに注目して—
 木下 佳恋 学力とは何か？
 —大田堯の教育思想に注目して—
 那須久羽歩 社会復帰プログラムにおける受刑者同士の対話の役割とは何か
 —メラニー・クラインの精神分析に注目して—
 三浦庸太郎 遠隔授業におけるコミュニケーションとは
 —現代の公共哲学に注目して—

佐々木 南実ゼミ

- 内堀 珠実 国語科における概念理解の実践
 ～国際バカロレアの手法に着目して～
 岡田 康彦 コーピングにおける声かけとその効果に関する研究
 工藤 駿佑 現代の教育に求められる能力概念（キーコンピテンシー）は持続可能な開発にいかに関与するか
 —探究的な教育を主眼におく2つの学校の事例をもとに—

ノルドストロム ヨハンゼミ

- 畑山 菜摘 リアル
 現実を超えたアイデンティティ
 —キャラクターライブに於ける「声」と「存在」—
 和田 吉揮 21世紀におけるポピュリズム
 —諸外国と日本との比較・分析—

原 和久ゼミ

- 小川 麻琴 言語習得に関する考察
 —日本の外国語学習とタイ人学生を事例として—
 亀甲 大河 中学校外国語学習指導要領と MYP Language acquisition guide の比較
 —第二言語・外国語学習者の動機付けの観点から—
 猿渡 涼香 親が教師であることによる子どもへの心理的影響

- 洲鎌 千乃 日本における「森のようちえん」に関する一考察
 —保育者の「子ども観」に焦点をあてて—
 田中 夢帆 犬と共に過ごすことによる子どもの心理的成長
 中畠 絢 一条校での国際バカロレア導入は教育現場にどのような効果や変化をもたらすか
 —D P 教員に着目して—
 平出 熙八 生徒の学習に対する主体性・能動性の向上について：アクティブラーニングの視点から
 三塚 莉風 中等教育における ICT の課題と可能性
 村松 美奈 義務教育課程における合理的配慮の在り方についての考察

茂木 秀昭ゼミ

- 野原 隆成 教育における AI 活用の可能性と限界に関する研究
 天野 愛美 日本とデンマークにおける教育の価値観や生き方への影響
 伊藤 花音 幼児教育における非認知能力養成に関するデンマークと日本の比較研究
 老川恵梨香 アフガニスタンの中等教育からみる教育水準向上についての方策と課題研究
 岡野 茜 現代の若者の育児と子どもに対する価値観について
 —日本における北欧型福祉社会の実現可能性の検証—
 額額 夏望 日本とデンマークにおける英語教育のあり方と第二言語修得への影響
 後藤 駿介 創造的分野における人工知能活用の可能性と限界に関する研究
 小林 奈央 教育とマスメディアにおけるジェンダーイコリティな社会づくりに関する課題の研究
 橋本 朋佳 幼児教育が与える幸福感を高める方策の心理学的研究
 丸山 高輝 創造性教育における学校教育の役割と影響に関する日本とデンマークとの比較研究

山辺 恵理子ゼミ

- 荒田 悠莉 現代の若者と自己肯定感
 ～何でもできる子は本当に幸せなのか。ニーチェの超人の思想から～
 泉 莉奈 日本語が日本語母語話者に与える影響について
 —サピア・ウォーフの仮説を手がかりに—
 伊藤 莉沙 普遍的（不変的）正義は存在するのか
 大森美衣南 今求められる教師の役割とは
 —子どもの可能性に焦点をあてて—
 坂田 涼 「私たちの日常に「愛」はどう存在するのか？
 桑田 裕理 生きる意味について
 ヴィクトール・E・フランクルの人生観をもとに考える
 下田尾佐保 「意味」という概念から解放されるには
 田原萌々香 人間の不等格さと、「自分らしさ」を尊重する教育の限界について
 塚崎 裕月 教育を「水の東西」から考える
 峯 利愛菜 自己肯定感と子どもたち
 ～高垣忠一郎の教育観と現代の教育の比較～

大学院文学研究科 令和2年度修士論文題目

国文学専攻

鈴木 武晴教授

菅野 愛美 万葉の挽歌の研究

長瀬 由美教授

田浦 佳奈 『古今和歌集』六歌仙と貫之の修辭

社会学地域社会研究専攻

進藤 兵教授

井草 桂太 表現の自由のなかの芸術の自由

吉川 一敏 社会教育における主として青少年及び成人の学習権の憲法学的把握

英語英米文学専攻

加藤 めぐみ教授

山口 啓 The Hidden Horrors of British Imperialism: A Study of Ruined Friendship in *A Passage to India*

HYWEL EVANS 教授

KITTOS JOTHAM

A Sociocultural Theory of Language Transfer

OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri 教授

米山恵里奈 — Feedback in EFL Written Discourse — A study of Effective Feedback for Japanese Students

臨床教育実践学専攻

鶴田 清司教授

久留見満貴 日本語教育における文学作品を用いた授業の意義
—円滑なコミュニケーション力の育成—

廣田 健教授

西 勇気 物語論的視点からみた教師の問い直しにおける「沈黙」の意味
—山崎隆夫の教育実践を手がかりに—

新型コロナ禍における大学の対応(連載)

令和2年(2020年)2月より日本でも感染が広がった新型コロナウイルス(COVID-19)の流行により、日本国内の大学においても入試、新学期開始などに大きな影響と変化が起こった。都留文科大学においても、3月よりさまざまな対応が断続的に起こっている。都留文科大学学報は大学の記録誌としての性格をもち、後世に対して「都留文科大学」を伝える役割がある。今事態は推移している中ではあるが、新型コロナウイルスへの対応を後日振り返るための記録として、特集を組みたいと思う。新興感染症の流行は長ければ数年にわたるもの(スペイン風邪では2年～3年)であり、本特集は著者を変えて今後断続的に報告をおこないたい。

新型コロナ禍における就職支援

副学長(学術・研究担当)
キャリア支援センター長

田 中 昌 弥



新型コロナウイルスの国内での感染が問題になったのは昨年の2月中旬頃でした。そして、下旬には、マスク不足とともに、海外の感染状況を受けて業績が悪化した企業の採用内定取り消しがインターネット上で話題になり始めます。それへの対応策として文部科学省は、3月13日、主要経済団体に対し、2019年度卒業生の内定取り消しの防止と、2020年度卒業生向けに「インターネットをはじめとした多様な通信手段を活用した企業説明会」を実施するよう要請しました(「新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた2020年度卒業・修了予定者等の就職・採用活動及び2019年度卒業・修了予定等の内定者への特段の配慮に関する要請について(周知)」)。

この時期、本学は、前号で杉本副学長も書かれたように、執行部の入れ替えのタイミングにあたっており、当時の執行部と、われわれ次期執行部予定者との間には、コロナ対策の認識において大きな隔たりがありました。わたしは2月末頃から当時の常任理事会メンバーに、現・次期執行部で合同対策委員会を設置し、大学間の取り合いが始まると入手が困難になる遠隔授業用のICT機器の確保や施設の整備、学生用マスクの調達などの手を迅速に打っていくべきだと進言していましたが、聞き入れられませんでした。有事に際して柔軟な組織的対応ができなかったことは反省点として記憶すべきだと思います。



オンラインによる就職支援の実施

4月1日の臨時教授会でコロナ対策本部の設置を含む基本方針が確認され、本学はようやく本格的な対策を進めることになりました。わたしはキャリア支援センター長を兼務することになり、早速、内定取り消しに遭った学生がどの程度いるのかをセンターに確認しに行ったところ、「一部にそうした事例はあるものの、可能な支援は行っており、大きな問題にはなっていない」とのことを取りあえず胸をなでおろしました。その後、学報143号でも述べたように、5月1日集計の就職率は97.7%で前年度よりも向上していましたから、昨年度の本学の卒業生は、まだコロナの影響を大きく受けずに済んだということでしょう。

しかし、就職戦線における影響が深刻になるのは今年度卒業生からです。2020年4月16日に全都道府県を対象とする緊急事態宣言が発せられたことを受け、キャリア支援センターでは、その直後から、全相談員の学生対応をオンラインに切り替えました。執行部の対応は、前述のような経緯で心ならずも後手に回ってしまったのですが、センターのスタッフは、この状況を見越し、オンライン対応に利用可能な機材を調達するための工夫を凝らしていました。

企業や教育委員会、官公庁の採用ではオンライン面接の割合が高くなると予想されたので、従来から行ってきた対面面接の講座と併せてオンライン就活のためのガイダンス、対策講座を実施し、学生の希望によって選択できるようにしました。それによって、大学に来られない学生も実家や自室から相談し、講座も受けられるということで好評でした。オンライン対策講座には、カメラ越しに表情を伝える方法の指導なども含めました。就職対策の模擬試験も在宅受験に切り替え、送料は大学が負担することになりました。他方、最終面接については、企業、自治体ともに対面によるものが多かったので、例年よりも教室を多く確保し、感染防止対策を講じた上で対面での面接練習を行いました。

こうしたセンタースタッフと、もちろん学生の皆さん自身の努力により、今年2月1日現在の中間調査では、進路の決定率が79.0%となり、最終的な就職率が好調だった昨年度同日の75.5%よりもさらに高くなっています。もちろん、あと2割の学生は例年以上に苦勞している可能性もあり、最後まで支援の手は緩められません、厳しい状況にもかかわらず健闘していると言ってよいでしょう。

コロナ対策を通して見えてきた新たな可能性

また、この数字には、コロナ対策を通して、本学の学生にとってはむしろ就職活動を幅広く行う条件が生じてきたことも影響していると思われます。

一つは、合同説明会に参加してくれる企業が増えたことです。これまでは、本学の学生に関心を持ちつつも、来訪にかかる時間の関係で断念していた企業が少なくありませんでしたが、遠隔システムが普及したことにより、ZOOM等を用いて参加してくれることが可能になりました。

二つ目は、1次、2次くらいまでの入りの段階の面接は、対面ではなくオンラインで行う企業や自治体が増えたので、学生も遠方まで出向く時間と交通費をかけずに、これまでよりも多くの志願先を対象とした就職活動ができるようになったことです。

三つ目は、これまでは大学に出向いて受講する必要のあった講座や就職相談に、遠隔でも参加できるようになり、地元での就職活動等で実家に戻っている学生や、留学中の学生、さらに卒業生にも利用してもらえるようになったことです。

就職活動、キャリア支援においても、厳しい状況に挫けるのではなく、その中から生まれてくる新しい条件を見つけ、積極的に活用することが、大切だということです。

今後に向けて

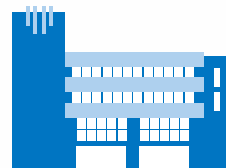
複雑な状況の中で試行錯誤しているのは学生と大学だけではなく、企業や自治体が優れた人材を発掘し、選び出すために費やす苦勞もこれまで以上に多くなっています。したがって、肝心なのは、この一年で急速に進んだIT環境への適応はもちろん、困難な状況にも対応できる人間としての底力を育て、採用側に見えるように伝えることです。

コロナ終息後もこれを機に生じた変化の少なくない部分は残ることになるでしょう。本学のキャリア支援も状況に柔軟に対応しつつ、新たな充実を進めていこうと考えています。

Pick Up!

—キャリア支援センターより—

コロナ禍の就職支援



リモートと対面で採用試験に取り組む

2021年度の教員採用試験はコロナ禍の影響で、各都道府県・政令指定都市教育委員会は試験会場の拡大や期日の延長、論作や場面指導のカット等、様々な変更を余儀なくされた。しかし、各教育委員会とも人材確保の面で、教員としての知識と人柄を重視した方針を変え、個人面接の比重を高くして対応を図っていたように受け取られた。また、コロナ禍は本大学、支援センターでも影響を被り、毎年行われる対策講習会や模擬授業対策会・説明会・学習会等が中止となり、志願者には受難の年となった。

そこで、当センターではリスクを補うことができるよう、さらに、志願者の要望により応えられるよう、教員採用試験対応策を実施してきた。5月からのリモートによる面接対策では家庭や学校にいても例年に劣ることがないように、知識・技術・コミュニケーション能力を高めることに重点を置き支援を進めた。さらに、メール機能を利用して論作文の添削も行ってきた。6月からはソーシャルディスタンスに配慮し、広い教室で集団討論・個人面接・模擬授業・場面指導等、対面での指導を実践した。以上の取り組みで、思いどおりに活動できない中ではあったが、学生の頑張りもあり例年に負けない成果を上げることができた。

教員アドバイザー・副センター長

渡邊 昌哉



集団討論対策



個人面接対策



リモートと対面の併用で より充実した支援の実現

面接対策として、Skype を利用した面談時間内での個人面接対策をはじめ、複数の学生が同時参加できる面接対策講座を実施した。この講座は学生の孤立を防ぐことも目的としていた。同じ目標に向かって努力している仲間を感じることで、合格に向けてモチベーションを高めることができ、学生同士悩みを共有する機会となった。緊急事態宣言解除後は、ほぼすべての受験先が対面式での面接試験実施となったため、対策希望の学生全員に応えるためにほぼ毎日、各種面接対策講座を実施した。

筆記対策としては、面談時間内での質問対応（数的処理や経済原論の途中計算の解説、問題集の解説の解説が大半）のほかに、Skype を利用した勉強会を実施した。この勉強会も学生の孤立を防ぐことも目的としており、○×クイズ形式や、演習形式（メンバー全員が同じ問題を解き、最も早く解答できた学生がメンバーに解説をする）で実施した。また憲法と社会科学の○×クイズを配信し、学生とキャリア支援センターとの結びつきを実感できるようにした。対面式が可能となってからは、数的処理と経済学の講義を実施している。

試験日程や試験内容の大幅な変更を受け難い対応を迫られたが、この経験は、地元に戻り受験している学生と来校できない卒業生のニーズに応えられていないという従前の課題を解決し、今後のより充実した学生支援を可能としたと感じている。

公務員アドバイザー・副センター長
梅澤 あゆみ



オンライン選考

特に、コロナ禍で加速された「オンライン選考」の対策が課題となった。

もともと動画配信、Web 説明会などオンライン化の流れはあったものの、その傾向は一気に高まった。昨年6月(就活ピーク時)のある調査によると40%以上の企業がオンラインで最終面接までを行っており、大手企業に限れば6割近い数字となっている。本学の学生にとっては交通費や時間のハンディ解消にはなったものの、企業理解、ネット環境、情報孤立など他学と共通の様々な課題が生じた。

リテラシーの面では、ホワイトボード機能を駆使しオンライン・グループディスカッション、グループワーク、使用されるツールも Skype、Teams、Meet、Messenger Rooms、Zoom など、未知の領域に手探りで臨む就活となった。

対策として各種ツールへの対応、最新機材の導入など、情報センターや教務、若手職員など関係各所の力を総動員して新しい試みを行った。Web 面接指導、動画選考対策、ハイブリッド方式（対面かオンラインどちらかを選択できる）のガイダンス、オンライン企業説明会など。ネット環境に不安のある学生のためには、教室や機材の貸し出しも行った。カウンセリングについては、産業界の変動の中で目標や夢を断念し、進路変更を余儀なくされる学生たちへの細心の対応も求められている。

企業アドバイザー・副センター長
山田 淳



2020年度ジェンダー研究プログラム講演会

開催：2020年12月1日（火）

講演者：福永玄弥 氏

韓国フェミニズムを〈読む〉

— 『82年生まれ、キム・ジョン』と社会学的想像力

今年度の講演会は福永玄弥さん（本学非常勤講師）を講師としてお招きし、Zoomで開催しました。開始時には87名、講演中には100名近くの参加者がありました。

福永さんはチョ・ナムジュ／斎藤真理子訳『82年生まれ、キム・ジョン』（筑摩書房、2018〔2016〕年）を、一人ひとりの人生（個人史）と歴史的場面との結びつきを社会構造的なかで理解する力とされる社会学的想像力（C・W・ミルズ）を補助線として、韓国社会の構造変動や女性運動・フェミニズムの展開に位置づけながら講演されました。本作品の主人公であるキム・ジョンは、会社員の夫とソウルのはずれに住む一児の母で、ある日を境に突然自分の母親や身近な女性の人格が憑依したようにふるまうようになります。主人公を診察する精神科医のカルテという体裁で、自身と彼女が出会った女性たちの個人的な物語を回顧するストーリーです。ナレーションは、国文学科4年生の小野寺絢香さんが担当しました。

韓国におけるジェンダー差別は、強固な儒教規範と日本の植民統治の残滓である家族法、軍事政権が進め

た開発独裁によって制度化されました。主人公の母が1960–80年代に経験した性差別は、国による産児制限と男児選好がもたらしたいびつな出生性比や、低賃金労働を甘受する女性に対して男性世帯員の選択が優先される家族関係に現れています。また、主人公の友人の語りからは、女性を二級市民として処遇する徴兵制が男性優位の就職活動を支えるよりどころとなっていることもわかります。このような女性個人が抱える問題を代弁したのが、従来の民主化運動に代わって1990年代に展開した女性運動です。

主人公の2000年代の経験からは、子どもをもつ母親の就労を排除する労働市場の構造がみえてきます。また、物語の舞台から去ることになる「名前がない女性」には、生計維持と通学の両立に苦心する女子大学生の姿が垣間みえます。いずれも1997年のアジア通貨危機を受けた韓国経済の構造調整の産物です。

今日の韓国の女性運動は、性犯罪とミソジニーに加え、公的・私的両領域での男性への従属も争点にしています。校則にみられる女性差別への抗議から #Me Too 運動にいたる

まで、「普通の」女性が担うフェミニズムが台頭する一方で、それへのバックラッシュが深刻であることが主人公の経験から紐解かれました。

福永さんは最後に、主人公が「つながらなかった」女性としての性的マイノリティや韓国籍を持たない女性たちを挙げ、2000年代以降のフェミニズムがマイノリティとの連帯を進める一方で、主人公からはその「同時代性」がみえないと強調されました。さらに、本書が日本でブームとなる一方で、「慰安婦問題」への関心には展開していない現状から、韓国フェミニズムが「他者」としてしか受け入れられていないとする福永さんの指摘には、越境するフェミニズム実践の困難を突きつけられた思いです。

講演後にはZoomのチャット機能を活用した質疑応答がなされました。韓国のフェミニズムがリベラルな男性を巻き込み、女性蔑視の実態を男性に可視化するうえで採った運動戦略や、現代韓国の家族制度などにも議論がおよび、双方向的な討論の場が実現しました。

（比較文化学科准教授 佐藤 裕）

講師紹介

福永玄弥（ふくなが げんや）

都留文科大学ほか非常勤講師。

台湾国立中央大学と韓国延世大学で客員研究員（2018年と2019年）。

専門は社会学、フェミニズム・クィア研究、地域研究（東アジア）。

「東アジアとセクシュアリティの近代」を研究テーマとして、2000年代以降の東アジア（台湾・中国・日本・韓国）における〈LGBT〉の主流化について論考を発表している。





2020年度国際教育学科講演会

開催：2020年12月22日(火)

講演者：町田宗鳳氏

文明論としての『イワンの馬鹿』

パンデミック時代の生き方を問う

今年度の国際教育学科講演会は、本学の特任教授で広島大学名誉教授の町田宗鳳先生により「文明論としての『イワンの馬鹿』」と題しておこなわれた。

ロシアの農民に語り継がれ、キリスト教を基にした民話をトルストイがまとめたとされる『イワンの馬鹿』のストーリーを題材に、21世紀の現代において、人間にとって正しい生き方とは何か、本当の幸せとは何かを問いかけ、経済格差が教育格差を生み、勝ち組、負け組などと言われる社会の課題にどう向き合うかという問題提起をされた。

イワンの2人の兄のように欲深い人は悪魔に騙されるが、イワンのように、兄達のわがままな主張も受け入れてあげるような欲のない人は悪魔につ

けこまれることもないという教訓話から、いくら出世をしたりお金があっても、家庭が幸せでなかったり、人間関係に悩んだり、体がぼろぼろという状態では幸せとは言えず、今あるもので満足し、心が満ち足りた人、何事にも心から感謝できる人、家族が仲良く暮らせることが幸せであることを論じられた。「物の（消費）文明」から「心の文明」へと文明の転換期でもある今、社会で活躍することも、自分のやりたいことを通して貢献することであれば良いが、出世やお金儲け（物や形）のためでは、結局本当の幸せは得られないので、目的を間違えないことが大切であると説かれた。

大きな欲（我欲）を持つと小さな幸せしか得られず、逆に小さな欲し

か持たないことで大きな幸せが得られるという逆対応の理を通して、イワンの馬鹿に登場する悪魔とは、自身の欲望のことであると喝破された。自分の生き方に関して答えを知っているのは自分だけであるから、言い訳をせず、努力の方向や目的を間違えず、心の声に耳を傾けて、自分のやりたいことを、世のため人のために愚直にやり抜くことで、本当の幸せを得ることができるといふ、イワンの馬鹿的な生き方を見直すべき時代であると訴えられた。

これまで当たり前のようにしてきたことが当たり前でなくなったパンデミック時代に、今までの生き方を振り返ると共に、今後の生き方を考えさせられる講演となった。

（国際教育学科教授 茂木 秀昭）

講師紹介



町田宗鳳（まちだ そうほう）

1950年、京都市に生まれる。14歳の時周囲の猛反対を押し切って突然出家し、臨済宗大徳寺で20年間修行後、34歳で寺を出て、再び無謀にも無一物で渡米。苦学してハーバード大学神学部を卒業後、ペンシルヴァニア大学で博士号を取得し、プリンストン大学、シンガポール国立大学、東京外国語大学、広島大学大学院を歴任。現在、

広島大学名誉教授、都留文科大学特任教授。専門は、比較宗教学、比較文明論。宗教学者、天台宗の僧侶。富士山麓にある超宗派寺院「ありがとう寺」住職。

NHKテレビこころの時代『法然を語る』、NHKラジオこころをよむ『無意識との対話 - 身心を見つめなおす』講師。著書に『文明の衝突を生きる - グローバリズムへの警鐘』、『人類は「宗教」に勝てるか』、『異界探訪』など多数。



2020年度後期比較文化学会主催講演会

人は見た目！というけれど

～あなたは「見た目問題」を知っていますか？

開 催：2021年1月13日（水）

2021年1月13日水曜日、比較文化学会主催 2020年度後期講演会をzoom上で開催しました。「見た目問題」について、NPO法人マイフェイス・マイスタイル (MFMS) 代表の外川浩子さん、「当事者さん」である神原さんと村下さん、MFMSのアドバイザーや映像制作をされている朴基浩さんにご登壇頂き、話をうかがいました。前半は外川さんによる「見た目問題」についての解説を聞き、後半は朴さんがファシリテーターとなり「見た目問題」に関する経験について神原さんと村下さんから「当事者」の体験や見解をうかがいながら、議論しました。

「見た目問題」とは2008年に出来た新しい言葉で、病気や事故、生まれつきで見た目に特徴的な症状がある人々がぶつかる問題のことを言います。「見た目問題」を持つ方は日本に推定100万人以上存在し、「当事者さん」と呼ばれます。今回ご参加くださった神原さんはアルビノ（先天性色素欠乏症）、村下さんはロンバゲ病（進行性顔面片側萎縮症）という症状があります。神原さんは

他にも弱視という症状も抱えています。また村下さんもロンバゲ病に伴いやすい円形脱毛症を経験されたそうです。お二人とも、「自分が『普通』ではない」と感じる事を日常的に経験し、その悩みを抱えてきたとお話くださいました。悩みと区切りが付いたのは、お二人とも20歳頃だったそうです。神原さんは大学で、村下さんは職場で様々な人々に出会い多様性に触れたことで、「普通」という考え方に囚われなくなったそうです。

MFMSは「見た目問題」にぶつかる当事者さんのサポートや当事者さんの子どもを持つ保護者のサポートだけでなく、「見た目問題」を多くの人々に知ってもらう活動、制度や法律の整備に向けた活動も行っているそうです。昨年には「履歴書から写真欄もなくそう」キャンペーンの呼びかけも始めています。

現在海外では黒人の白斑症のモデルやプラスサイズモデルが活躍するなど、美の価値観の多様化が進んでいます。また、SNSの普及により一般の当事者さんが声を上げ始めて

います。ぜひ「Birth mark（あざの意）」とSNSで検索してみてください。等身大の当事者さんの発信に接することができます。

今回の講演会で最も大きな課題だと認識させられたことは、当事者さんとの接し方です。当事者さんに対し「私は気にしてないよ」と言うことは、当事者さんを普通ではないと見なしていることの表れなのではないかという議論がありました。当事者さんもそれぞれ異なる症状や価値観を持った別々の人間であり、一つの結論を出すことはできません。私は当事者さんも当然普通の人間なので、一人一人と普通に接するという以外にないのではないかと考えました。私たちに出来るのは「見た目問題」を認知し考えることです。この文章を読まれた方々はぜひMFMSやSNSなどを通じ一度「見た目問題」を調べてみてください。そして今度は周りの人に「見た目問題」を紹介してください。認知の輪の広がりが必ず良い方向に導いてくれる。私たちは今回そのように感じました。

（比較文化学科 高橋真洋・大野千緒）



講師紹介

外川浩子（とがわ ひろこ）

NPO法人マイフェイス・マイスタイル (MFMS) の代表。生まれつきのアザ、病気や事故による変形、傷痕、脱毛など見た目に特徴的な目立つ症状がある人たちがぶつかる困難を「見た目問題」と名づけ、問題解決を目指す。著書に『人は見た目！というけれどー私の顔で、自分らしく』（岩波ジュニア新書、2020年1月）がある。

卒業演奏会を終えて



本年度の音楽研究室主催の卒業演奏会につきましては、コロナ禍の厳しい中ではありましたが、音楽専攻の先生方をはじめ大学関係者の皆様、また音楽専攻生のお力添えをいただき、無事開催することができました。審査並びに運営に携わっていただいた皆様に改めて感謝申し上げます。この卒業演奏会は、音楽専攻での4年間の学びの集大成としてのステージであり、これまで3年間、先輩方の素晴らしい演奏を観させていただき、私たちもその舞台上で演奏することを目標にしてこれまで練習に励んで参りました。卒業演奏会に至るまで、私自身の技術不足に悩んだり、思うような表現ができなかったりすることも何度かありました。その際は、先生方に丁寧にご指導をいただいたり、仲間からはアドバイスをもらったりしながら、最後まで自らの演奏を高めようと取り組んで参りました。本番ではその成果を十分に発揮できるように精一杯演奏に臨みました。これは私にとって非常に貴重な経験になりました。

これまでの音楽専攻での学びを通して、私は単なる演奏の技術を学ぶだけではなく、音楽の楽しさや素晴らしさを知ることができました。一方、練習を通じて私自身の課題を見つけ、それを解決する機会も与えてもらいました。今後私たちの多くは、今日までのように音楽を演奏する立場から、音楽を活かし、その良さを伝えていく立場になります。この4年間本学で学んだことを成長の糧にし、社会人としても日々精進していきたいと思えます。

(初等教育教育学科 音楽専攻 4年 小坂梨紗)



卒業制作展を 振り返って



会場風景

私たち図工・美術専攻の4年生は、ゼミに所属してからの3年間それぞれのペースで制作活動に励んできました。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、世界中が混乱の渦に巻き込まれた1年であったと感じます。図工・美術教室においても使用禁止になる期間があったり、部屋の使用人数を制限したりするなどの感染症対策が行われました。このような状況の中で、私たち4年生は年度末の卒業制作展に向けて制作活動を進めていく必要がありました。今まで誰も経験したことのないコロナ禍において、今の自分にできることは何かを考えながら、ひとりひとりが自分と向き合い制作を進めた1年となりました。

私は、卒業制作として木でお皿やフォークなどの食器類を作りました。木に興味をもったきっかけは、2年生の時の基礎工芸実技で鉋（かんな）を使ったことです。この時、木を削る感覚に大きな衝撃を感じ、木への思いが芽生えました。3年生の工芸実技でも木で箸やスプーン、お椀などを制作し、手で木を削ったり彫ったりすることの楽しさを感じました。新型コロナウイルスが流行し始めた頃に、私は教員採用試験対策や卒業論文、卒業制作に向けての準備などを始めました。世界中が混乱する中で、私自身も先の見えない不安に襲われることが多々あり、勉強が思うように進まない苦難の日々が続きました。そんな時でも、木を削っている間は様々な不安を忘れることができ、ものづくりの素晴らしさを改めて実感したため木を使った卒業制作にすることを決めました。手を動かすことで頭の中が整理され、勉強へのやる気にもつながっていくことに気が付いた私は、制作活動と勉強を同時に進めていきました。

教員採用試験や卒業論文提出などを終えて卒業までの1ヶ月間は、4年間の集大成とすべく全力を注いで制作活動に集中しました。今までの授業で身に付けた技法を使って自分で考えて作ったり先生方に相談して一緒に考えたりして、試行錯誤を繰り返しながらなんとか作品を完成させることができました。このようにして出来上がった作品は、これまでの努力や指導して下さった先生方の期待に応えたいという想いが詰まった唯一無二の作品になったのではないかと感じています。

卒業制作展（会期：令和3年2月2日～2月5日）は、私たち4年生がコロナ禍で葛藤し自分自身を見つめながら完成させた様々な想いが込められた展示となっています。感染症対策として、4年生全員が集まって制作したり展示会場の準備をしたりすることはありませんでしたが、仲間のそれぞれの事情を理解しお互いに補い合いながら準備を進めてきました。コロナ禍においても先生方のご指導の下で卒業制作展を開催することができ、大変嬉しく思います。

この卒業制作展の開催にあたって協力して下さった先生方や関係者の皆様、足を運んでいただいた方々に心から感謝申し上げます。

（初等教育学科 図工・美術専攻 秋山 琴未）



筆者作品

渋谷実 巨匠にして異端



志村三代子・角尾宣信（編）
2020年10月 発行
水声社

◇志村三代子 比較文化学科 准教授

国際バカロレア教員になるために TOKとDPの教科の学びと授業づくり



半田淳子 編著
原 和久、他 執筆（第3章 都留文
のIB教員養成&授業紹介を担当）
2020年11月 発行
大修館書店

◇原 和久 国際教育学科 教授

国際共同研究 三・一独立万歳運動と植民地支配体制



笹川紀勝、李 泰鎮、邊 英浩 編著
2020年12月 発行
明石書店

◇邊 英浩 比較文化学科 教授

日本中世の村と百姓



鈴木哲雄 著
2021年1月 発行
吉川弘文館

◇鈴木哲雄 地域社会学科 教授

学びの質を高める！ ICTで変える国語授業2 —応用スキル&実践事例集—



野中 潤 編著
2021年1月 発行
明治図書

◇野中 潤 国文学科 教授

エネルギー転換の国際政治経済学



高橋 洋 著
2021年1月 発行
日本評論社

◇高橋 洋 地域社会学科 教授

編集後記

オンラインだからできたこと ——「イシグロの庭」からの生中継

加藤めぐみ

2020年2月1日0:00。イギリスがEU離脱をした歴史的瞬間を私はイギリス中部のバーミンガムから西に20kmのウォルヴァーハンプトンで迎えた。その日に行われる国際イシグロ学会に参加するためである。日付が変わる瞬間、火花が上がるか、暴動が起きないかと緊張していたが、街は物音ひとつせず、静かにその時が過ぎた。

学会前夜、イギリス人参加者は「EUパスポートが使えないなんてあり得ない！ Brexitという言葉も聞きたくない！」と嘆いていたが、ホテルに戻ると一階ラウンジで、EU離脱を祝う仮装パーティーが賑やかに催されていた。残留派 vs. 離脱派と空気の違いを実感した夜となった。

2017年にカズオ・イシグロがノーベル文学賞を受賞して初となる学会には世界中から50名が集った。マスクもせずにパブの密な空間で打ち上げが出来たのも、いま振り返ると夢のようである。

それから半年後の7月11日。同じ主催者が「イシグロと国際的危機」と題するグローバル・セミナーを企画し、イギリスで親睦を深めた仲間たちとオンラインで再会することとなった。セミナー当日と長崎でのリサーチの予定が重なったので、私は学会のオープニングイベントとして、イシグロが5歳まで過ごした長崎の生家からの生中継を提案した。日本でイシグロ学会が開かれたら、生家を訪問したいとのイタリア人研究者の言葉を思い出したからである。

生家は家主が変わり、建物も新しくなっているが、日本庭園は昔のまま。灯籠や古井戸のある庭は短編「夕餉」や『わたしたちが孤児だった頃』などにも描かれていて、イシグロ研究者の関心は高い。オンライン学会だからこそ可能になった「イシグロの庭」の中継。急な提案に快く柔軟に応じて下さった学会主催者、家主の方、長崎のイシグロブッククラブの皆様には心から感謝申し上げたい。



イシグロの生家跡で、所有者の吉田良三氏と
(2020年7月17日『長崎新聞』より)

学生アイデアによる

新ツルブンステッカー完成！



新色は「元気」をイメージしたオレンジ色。
コロナ禍におけるマスク着用を表現したアイコンには、
笑顔で過ごせるようにとの願いも込められています。

制作の様子はこちらからご覧ください↓

その他 TU エメラルド、グレー、ピンクなどのバリエーションも



*ツルブンステッカーは広報活動の一環として、主に在学生や受験生向けに配布しています。



〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL: <http://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第145号 2021年3月10日発行

都留文科大学広報委員会

鈴木健大 (委員長)・日向良和 (副委員長)・田中昌弥 (担当副学長)・長瀬由美・加藤めぐみ・
齊藤みどり・佐々木南実・水口 潔・藤江 毅 (情報センター担当)・山本香栄 (経営企画課長補佐)・
雨宮容一 (企画広報担当)・関戸聡子 (企画広報担当)・天野麻由 (企画広報担当)